コトシラ姉。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コトシラ姉。

【Ｎコード】
Ｎ９５５４Ｚ

【作者名】
白紙描写

【あらすじ】
『殺人しましょ。』で、主人公コトシラが実のお姉さんとただただ単に、人を殺してく残虐エピソードです。手始めに弟から殺しましょ。

1

「真剣な話、一度でいいから、人を殺してみたい物です。姉さん！」

目の前には、おれの姉がいる。
おれは、誰でしょう？おれはコトシラです。

おれは、無断で姉の部屋のドアをこじ開けて、中に入り、絵を描いている姉に話しかけた。

「？なんの話を持ち込んできたのかしら？不思議極まりないわよ？コトシラ。」

おれは、姉さんにしか、相談できないと踏んで、実の姉に…話を持ちかけているのだ。

おれは、人が嫌いです。
でも、姉は大好きです。

その名の通り、相談できる唯一の頼みは、お姉さんしかいないのです。わがままですけども。

「おれ、どうしてもやらないとうけない。相手がいるんです。どうか、頼みます。姉」

深刻な悩みです。普通人を殺めるなんて、行為が許される世界ではないとわかっています。理解しています。けど、どうしても、どうしても…殺したい相手があいます。しかも複数。

「なにをやるのかしら？まず、そこから説明捨てくれる？」

真剣に、訊いてくれるようだ…本当に助かる。親切で優しいお姉ちゃんだ。

1（後書き）

すぐ更新します

2

「とりあえず、誰からぶっ殺しましょうか？」

最初からその言葉を振って、おれに戸惑いと躊躇を与えるように持ち出した言葉に見えた。

「そんな潔くていいんですか？もう少し、焦らし揺さぶってくださいよ。…殺人は駄目だと」

野獣と人が敵対し、共同するこの世界。少なくとも、他殺はよくあるこの世界である。

そこには、おれらの町があって、村があって、家があって、そして、ここが姉の部屋だ。

姉は、絵を描くのが好きらしい。そこら辺、部屋一帯は絵と紙だらけだ。何の絵を描いてるかだって？

それは言えない。

言う必要がないからだ。

正座しています。

「あらあら、その言い様は何なのかしら？…弱気とか、そう言うのは止めて欲しいのだけれど、」

と言うけど、正直の所は、もろに本気です。それ以外の面持ちでは言い出せませんですよ。

「止めます。と言うよりは、初めから本気です。そりゃもう、全力です。」

「いい心がけね。」

誉められるほどでもない。
あ、誉めてはいないのか。

「心がけはいいません。信念です。ムカつく奴は、土に埋めるのが正しいと信じてます。我が地方の名残ですよ。」

「そのような名残が有るのなら、私も土に埋まってます。」

恨みを買われたこと有るのかな？
…そうか、なる程、それが怖くて、毎日家に部屋に引きこもって、なんやなにやらを創作していたのか。

頷ける理由。

「怖くて、外に出れないんですか？姉」

唐突にも、適当に話しを持ちかけた。

「現実逃避がしたいの」

すぐ答えてくれた。

「現実逃避って何ですか？感じが難しいです。」

おれの実年齢は、１１歳で小学生五年生と言ったところです。
けども、この世界に学校なんてないし、プールの授業なんて物もありません。
付近の湖が海だと思っていました。
でも、お父さんから聞いた話だと東北四百キロに海存在するとしりました。
人間知らない物は、概念から知らないようです。
「この世界の否定です。」
「まるまる否定するんですか！？」
「いえ、分かりやすく纏めただけです。あなたは、小学生だから分からなくてもいいのよ？　コトシラ」
小学生ではない！
小規模機関第二百五機関中立機関だ。
この王国の国立機関学校の直属直轄学徒生だ。
嘘です。狩人の卵です。
「分かってみたいです。姉！」
「好奇心は狂気よ。それでもいいの？　後戻りは出来ないわよ？」
姉が凄い形相でこっちを見るので、そっぽを向けた。
悪魔と天使は、いったい何がしたいのか？神の基準は信者の数で決まるのか？

そう言った疑問の深みにはまったような…相違や矛盾を会わせようと頑張る哲学者のように、

「何を考えてるの？　以外と怖いわよ。コトシラ。…小学生らしい表情をしなさい。」

「殺人を犯す話を持ちかけた時点で、小学生の表情なんて出来ません。訝しげで険しい表情と言ってください。」

「言いたくないわ」

その拒否を発動した顔を見ていると殴りたくなってくるけど、年の差と暗黙の格差で何も出来やしない。

それにしても、ペンキや絵の具のにおいがひどいな。ミネラルウォーターで筆を洗うところが姉さんらしい。

ゴミ箱の内側の内蔵がペットボトルの墓場になってたし、

ここからは確認とれないけど、多分そうなってる。

「一つ、話が脱線していようで、していないのだけれども、そもそも、どうして、そこまで人を葬りたいの？」

安易に直接的なことを言う姉。

部屋の温度が一気に下がる、それはあたかも、何かに縛りを利かした蛙のように、

「それ、言って言いの？姉さん」

「言っても言いけど、さっきみたいに地方がどうのこうのと言う寝

言はなしでお願いします、わ」

「わかった…」

息を飲む、ここで笑いを取ってしまったら、おれが誰かに殺される。
笑いすら取れないけども。
空気をのむ、おれの信念、ムカつくだけでは説明不足。本当の正真正銘の真理を言う。てか吐き出す。

怒りや恨みだけじゃない、もっと大きな理由。
それは

「自分が嫌いだからです。」

「？　よく聞き取れませんでした、もう一度言ってくれる？」

姉は椅子に座り、こちらを見下すようにしているため、言う通りにする。

「自分が嫌いで、自分は人で、だから、人が嫌いです」

ずっと自分に愛想尽かしてた、俺だけじゃあな筈、日本人なら殆どそう思ってる。
俺たちは日本語を喋る異世界人だが、きっと日本語を言える人は、考え方も微々に似てると信じたい。
その案だ。

「それは、人が嫌いだから自分が嫌いと言っているの？」

逆転の発想は、哲学者とかがよく駆使する類だ。

同じことを言ってるだけだけど、

「全部嫌いです。そこまで言いますか？　言いますよ」

「可愛い脳味噌してるのね。弟として、ここまで完成された稚拙な思考を持っている弟は初めてよ。嬉しいわ…お父さんに感謝しようかしら。」

おれを生んでくれた母と父に両方に感謝してよ。
なんで、父さんだけなんだ？
深く考えないことにした。

「おれは嬉しくない、けど、楽しいし面白いではある。この世の生まれてきて…」

「あなた、神経どうかしてる…あ、人を殺めようとしている人に、正常な人はいませんね。」

「姉さんも引きこもっているだけですし、何をやっているか？と聞けば、紙一面に、豆腐の絵や牛乳だけの絵を描くだけですし、人として歪んでます。」

ついに、言ってしまいました、禁句とされる一言を…
恐らく、この言葉に姉はこっぴどいおれを下界の地獄に馳せらせだろう。

「人がいなくならないと、平常心を保てない？コトシラ」

人が今より少なければ、より良かったかもな人間関係的にけど、この世界も人が多すぎる…

あ、悟った。
なる程、おれは人が嫌いな訳ではなくて、人によっていただけなのか…
「気づきました！姉！俺は、人に酔っていいだけです！すごいです姉」
気づいてみれば、簡単なことでした。人の居ないところへ行けばいい話だったのです。
「…それで？　あなたの今の意志は…何？かしら」
頬杖ついて、纏めてくくって、訊いてきた。
勿論答えは、
「人を減らせばいいんです。何処かへ逃げるなんて出来ません。…手始めに、弟から行きましょう。」
訂正はしない、決意表明をしたにすぎない。
「あはは、やっぱりそっちに繋がるのね。面白いわ。なら決まりよ。私も協力してみるわ」
「是非お願いします。」
なんだか、意味がおかしいけど、成り行きって奴に任せます。
だって、結果が欲しいし、嫌いな物は嫌いだから、
姉は、椅子から立ち上がり、筆立てを盛大にぶちまけた。

3

「散らかりました。誰の仕業かしら？　ね？　コトシラ」

「おれが言えるのは、姉自身がわざと蹴り飛ばしたと見受けられますので、姉の自業自得です。」

お茶目にどじをした…とは言えません。だって、大切すぎるほどの存在である姉さんを体の低い個性の位置づけをするのは、おれだけの判断ではまかなえません。

おれは、誰よりも姉だけは認めます。
従います。頼みます。

「そうね。私がすべて悪かったのね。なら、私は筆以下の存在で良いわ」

位を下げたのか？
意味が分からない。…おれをあざけ笑っているとか、か？
おれの中には、姉しかいないから、姉はおれを弄んでいるというのか？
位を下げるというのなら、おれも下げないと…

止めた。そうなら、そうであるのなら、おれが姉を虐げることだって出来るじゃないか。

「そこからの結論だと、姉さんは、俺の道具ってことになりますよ？　それでもいいの？　いじりますよ？」

おれはバカみたいなことをいってみる。
この言葉に『扱う』の意味が込められてはあるけど、協力してくれるのは姉さんの方だ。下手に出るのが当然なのに、弟なのに、ここまで自分勝手な言葉は、生まれて初めてだ。
いや、もう口にしたから、生まれて初めてだっと訂正すべきだな。

「馬鹿なのは私の方です。あなたの方がずっと優れてますよ？　コトシラ。」

言ってくれましたね。とどめです。
姉さん本人は、計画案立ったのか、偶然の口だったのかは、皆目見当もつかいない。
けれど、心を読んでいるとしか思えない。言動。
心の内を覗き込む、人心読解力。
偶々と言うことにしよう。

「おれは優れてはいません、恐れ入りますが…ね？」

床に転がる筆を手にしたコトシラ。
この行動に意味はないけど、コトシラは何となくで手にしてみた。

「あらあら、自分の価値を低く受け取るのね。…なら、『よくできている』って言うのはどう？　文学的ではないかしら？」

良くできているとは、何だろう？
そして、何故そのように、そのような言葉がほいほい出てくるのでしょう？
おれは、文学よりも数字の方が好きだけどね。

「一つとしていってみては、おれがよくできているとは何ですか？」
難解授業の答えよりも気になる…言葉回し。
一言言って、おれの方が教わる側で教える側ではないことは、いつも通り知っている。なので、
人の話を聞くときだけは、凄いですよ。
人間メモ帳です。自称するくらい自身があるます。

「その質問を今、答える必然性はないわ。…あなたがそれを認めるか、認めないかを私は知りたいの。」

何を理由にしてそうなったの？
あ、おれの価値観についてか。なら、答えは一つだけ。

「認めません。おれは良くできていないから。それと、狂っているから…」

そう、自分のそのままの言葉だ。
おれは狂っている…人で居てはいけない。と言うことで、人を殺めます。
減らします。

そこが、よくできているの…

「ん、何か、叫びましたか？」

「何も言ってないわよ。あなたは殺人的だと言っただけよ。」

「言ってるではありませんか」

「そこは保留します。と、時間がもったいなく感じてきましたから、今から始めようかしら？」

訊かれなくとも、おれは筆を片時も離さず、正座から直立しています。

もう今からでも、やれますよ？　筆で…

「見てごらんのように、もう準備は整っています。やりましょう。姉」

「いい行動力ね、見込み通りよ。でも、筆だけでは、眼球くらいしか潰せないんじゃない？」

物理的に、力のある人でも、簡単に人を殺せますが…生憎、持ち合わせている人物は、子供と女性、…どう見てもやられる側の人材である。

「そう言われなくとも、筆で肉を貫くのは困難でしょうし、皮すら外壁ですよ。」

筆の強度と鋭さを軽く見積もっても、あの弟を殺すことは不可能です。

弟は言ってしまえば、俺より強い。

あ、でも、筋肉とかで、攻守を増強しているわけではないです。

単に、狩人の血が強く、頭もキレています。

オールトータルに、万能な人と言いましょう。

それが敵。外敵です。

「嫉妬心だけで、筆を用いて殺すのもやぶさか不満でしょうし、攻

撃力不足です。あなたが、どれほど、力があっても弟には勝てませんよ？」

言い回しが解読できない。
つまり要するに、筆と腕力を増大させても尚、弟には勝てないということを良いついのだろう。

…
…ぷ、当たり前の言葉ですよね。
筆で人を殺せたら、書道界に衝撃と衝動が揺らぐこと間違いなしですね。

「小難しい言語ありがとうございます」

「いえいえ、どう致しまして…あ、良い物がありましたわよ？　これはどう？」

これはどう？と蟠るおれに、差し出されたのは、コンパスでした。

「コンパスですか？　考え物ですね。…確かに、筆とは数段階上等の製品ですけど、人を殺すほどの殺傷力があるとは思えません。あと…」

あ、いや、ここは全然言える立場ではない。これは言うべきではない。

コトシラは、言葉後半言いかけた言葉の意味を理解して、口を閉じた。

「あと？何か、言いたそうだけど、…何なら、言ってくるれかしら

？　気になります。」

気にしないでください、気に障りますから、自分に対して…

「言えません。これは使えますよ。姉」

すぐさま、話を切り替えたが、流石すぎる姉はそれ以上は詮索しなかった。

「どこが使えるの？　只の文房具じゃない。それとも、最近は文房具で人を殺めるのが流行りなのかしら？」

話を合わせてくれる気配は無し。正直の意見でしょう。

あきらめていましたが、やはり、文房具は質の悪い狂気にもならないらしい。

「文房具類は諦めました。」

素直に言ってしまえば、それでおしまいのことだった。

時間が勿体なかっただけでした。

「それでいいのよ。なんなら、王道に任せて、包丁はどうかしら？　日本の拳銃よりも殺傷力高いわよ？　それに、すぐに手に入れられる。」

王道が一番安全で、成功率も高いと訊かれる。おれはそれさえも、背きたい。

「包丁は、返り血が付着します。王道な理由で片付けます。洗濯が大変です。」

一捻りが欲しい。こんな物でも、息耐えるのか！って奴。

「サランラップ」

「笑ってしまいます。」

「水槽の角」

「水槽がないです。」

「事故死」

「運命は変えられない物だと思います」

「ネタ切れね。」

少なすぎる持ちネタだった。

笑い殺しとか、無理ですねよ？

「姉さんが殴って殺してください。」

本気にはしてなかったけど、何となく、言ってみたくなった。

「私の体を見て、そう言ってるの？」

体育会系ではないのは明らかだった。

言うなれば、貧弱そう。

「意外性ですよ。そんな魔法でも持っているのかな？と思って…」

「みる世界を間違ってるわよ？　魔法なんて使えないけど、そんな系、合ったじゃない？」

どさくさに話がよからぬ方向に直進する。

「科学ですか？　そんな回りくどいことは嫌いです。…もう、椅子で良いです。姉さん椅子借りますね？」

呆れて、そうすることにしました。

「あら、そう…」

4

「今日は、親が留守ですから、丁度良いところに杓文字が有るって所ね。」

台所へ向かったと思えば、馬鹿な考えを実行する。態とと言うのはもう間違いらしい。
計算してるとも、思えなくなってしまいそう。真性とも認めたくない。

これは誘導人証しているに違いない。
ややこしくなってきたから、考えるのはよそう。

「杓文字では、蒲鉾を切断するのがやっとだと思いますが、…しかも、すっごい切れ味の悪さで…本当に出来ますか？」

訊いてみる、おれの左手には姉の座ってた木星の椅子。
歩く度に、床とスリ引きずる音がする。気にしない方がいいのか、静かな二階建て一般住宅に、鳴り響く。
それと、ここまで語るとここも語りたい。…姉の部屋から階段を降りる際、騒音がとてもじゃないけど、五月蠅かったです。

姉に『片手引きずるのは止めなさい。』と優しく怒られたが、おれに、そのような言葉を今更、言う方がおかしい。

おれは、人間として終わっているので…

「叩いてなぶり殺すのなら、可愛いと思わない？　その理由です。」

「可愛いさの問題ですか、別に、可愛く無くても良いし、姉に、杓文字は似合いません。…姉は、そうですね。釣り針が似合います。」

抉るようで地味な道具、魚類なら『し』の字の悪魔。文字通り、『死』を意味しています。

これまた難題で、どう利用して人を亡き者にするのか？　が一番の課題。

まあ、釣り針なんて、買ってくるの面倒だから、語らいで終わらせますけど。

「釣りは好きではないの、私。言うのなら、泳ぐのが好き…かもね。」

昔は湖で泳いでいたとか、今は知りませんが、よく泳いでいたので好きになる…とは、あり得るかも知れませんね。

「おれは、泳ぐのは苦手です。泳いだあと、風邪をひいたり…何てことよくありましたし、」

「それは知ってますよ。コトシラ、あなたはよく、風邪をひいていました、弟と違って、病弱だから…よくよく看病したりしていましたわ。」

お母さんより、お世話さんだ。

おれには、そうされた記憶がないのは、何かの陰謀かも知れないな。

ガジャ
　ギギ

椅子が引きずれる。

「とりあえずだ。姉、その凶器で本当に、いいのか？」

確認、今の時間の進行具合だと、もう時間切れだから…杓文字でいい。

杓文字が人をホフる程の殺傷力が無くとも、姉事だから上手く使ってくれるはず。

絵を描くのは、空間を掴むって事だ。

人間の構造も、絵を描写するのと同じ要領で、把握し、ピンポイントで突くことだって出来る筈。

物は試しだ。

杓文字で死ぬ人間も見てみたいしな。

「あら？　少し前まで、否定や拒否を行使していた、にも関わらず、今度は肯定ですか。心がコロコロ変わるのね。コトシラ」

コロコロ変わるのは、場面と時間系列だろ？　それに合わせて、人が動いているようなもんだ、大きくは言えないけども。

「時間がないんだよ。そろそろ、弟が帰ってくる時間だろ？」

４時５６分。五時丁度に帰ってくる訳ないし、もしかしたら、今来るかもしれない。

心の準備も必要で、殺す準備も重要。

…トリックや殺人装置を配備するわけではないけど、玄関付近で待ち伏せして、律儀な弟が靴を靴箱に、収納する背後を狙うのだけど、

兎に角、ゆとりの時間は合った方がいい。
その案だ。

「かしこまりました、じゃあ私は、夕飯前のおやつでも作っておくわ。弟が来たら呼びに着てね、すぐさま、トドメを刺しますから…」

「うん、心強いよ。」

…

コトシラとコトシラの姉は、自分達の持ち場につき、弟が帰宅するのをまちまちと待った。

一方、その頃より少し前の弟と言えば、
草木が生い茂る、村のはずれの狩り場で化け物を狩猟していた。

ブギャシャリ

「二十三頭目ですね。あと、一匹で三の倍数になって、歯切れがいいと思いましたが、残念。時間切れです。」

いつもながらにして、１０分後行動を心がけている、コトシラの弟は、今日も歯切れが悪い狩猟数で用事を終える事になりました。

週に三回の炎狩猟部の部活は、とてもきつく生半可な気持ちの持ち方では到底、続けることが出来ません。
継続は、大切だと弟は心がけています。

その甲斐あってか、近所で噂の天才児と発展している様子です。

部活動のメンバーは六人です。

ここでは、メンバーの名前は伏せておきましょう。

「お～、コトヤ。今日も前にまして、歯切れの悪い数値を叩き出すじゃないか。…しってっか？　二十三は、素数なんだぜ。」

と、コトヤの所属する炎狩猟部の副部長、が清々しく話しかけてきた。

「馬鹿にしているの？　僕は、そこまで狙った数つは出せないし、自己ベストも、更新しちゃいないよ。そもそも平均値と同じくらいだし。」

一般人は、七時間に、十三頭くらいが妥当なところだが、コトヤと言う者、およそ半の三時間半くらいで二十三頭討伐してしまうのだから、言葉って言っている以上、凄いことなのである。

他の部員に比べると、やや、慎重すぎる面が有りはするがそれでも尚、結果と成果は上位副部長と互角の格差だ。

誰も文句を言わない実績と言える。

「はっ、均衡を重視するおまえの台詞は、俺からしてみればクソ喰らえだ。…俺なんて、１９匹ぞ？！、お前と２の倍数差で負けているだ。文句の方が先に出たがるからやってられない。」

副部長は、結構飽きやすい性格してるから、途中半ばで、立ち昼寝とか、立ちうたた寝とか、闘いながら寝る事だってしていた。

この人も、十分、人から文句を言われる闘い方しているよ。

「文句は言ってもかまわないけど、僕はそれよりも、副部長さんの顔の傷がおぞましいです。」

一昨日の部活の話し。

副部長さんは、いつも道理熱心に、狩りをやっていたのだけれど、突然現れた一級化け物に意表を突かれ、顔の深々と傷を負ったのだ。

顔が横にスライスされたようです。

きれいに、出来た顔の地平線が思いのほか、おぞましく映ります。

元々顔つきの悪かった副部長さんですが、その件で一段階、飛びっきりのある顔力を誇るようになりました。

「うぃ？　何か文句でもあるのか？　悪いけど、もう俺は文句を言えない立場になってしまったらしいんだよ。」

「え！？　どう言うことですか？」

いつも僕だけに文句を言っててくれる、副部長さんが今回に限って、文句を言わないなんておかしい。

顔つきがおかしくなったから、頭も可笑しくなったと言う理論を、誰かが証明してくれたら、僕も潔く、躊躇い無く認めるけど…

本当に、どういう事でしょう？

「おい、コトヤ」

なぜ、理解できない内に、僕の肩を叩く副部長さん。

何でしょうね、この感じ、しんみりとしますよ。全く、
次の言葉に、驚かされた。
「お前が今日から、副部長だ。今日から、俺の名は、稲荷口と呼んでくれ…」

イナリグチ。
初めて、副部長さんの名前を訊いた気がした。
何時だって、副部長さんは、『俺の名を呼ぶな！　おれは、副部長さんだぞ！』怒っていましたからね。
「イナリグチでいいんですか？」
飲み込みの早い僕は、再度、確認した。

5

「よぉ、副部長さん。」

そう言ってくれるイナリグチ。
僕の名前を差し引いて、副部長さんとは、つくづく、僕も成り上がったものだ。

「そんな事言わないでくださいよ。半分、本気にしちゃいますではありませんか。」

僕はそういう、何、なんて事ないよ。
僕は僕自身の力を知っている。
副部長だなんて、柄でも器でもない。

僕はただの普通の人です。

「本当の事を言っているだぜ。ほら、思い出して見ろよ。この傷を…」

イナリグチは、自分の顔の傷をなぞる。
痛くないのか、綺麗に沿っているのか、何ともない表情を見せる。
一昨日の大怪我だったのに、ここまで回復するイナリグチさんはやっぱり、ただ者じゃない。
僕はそう確信付けるしかなかった。なぜなら、僕にとってのイナリグチさんは、副部長さんだからだ。副部長は何時だって、強い人やタフな人何だから…

「この傷の事で、部長に愛想尽かされちゃったりしてしまったんだ。…そして、その結果、俺は副部長を下ろされる羽目になったんだとさ。候補にお前が配属される。」

嘘みたいな話ではある、あの頑固で堅い部長さんが、僕を選ぶなんて…いえ、それ以前に元副部長のイナリグチを下ろす事自体、不自然だ。

嘘だと言いつけることは出来るとして、嘘じゃなかったときは、イナリグチさんを疑うことになる。
ややこしい限りだ。

「それは本当ですか？　僕は信じますよ？」

「信じさせる義理はない。な？　副部長」

僕を見て副部長と呼んだ。これは決心付けさせる言い方なのか？
そうであろう。

「じゃあ信じます。…あ、そうだ。僕、これから、五時までに家に帰らないといけないんだ。だから手伝ってくれるかな？　獣の死骸集め…」

僕が部員を操る事なんて出来るのか、確かめるための指示だ。
別に、従ってくれるとは思っていない。
従わなければ、それまでだったと言える。

「分かりましたぜ、副部長」

とイナリグチさんは、僕の話を聞き、素直に従いました。

僕は身を疑い。一瞬思考停止し棒立ち状態で佇んでしまいました。
辺りは、肉片と血肉の海です。
無論、それらの破損物は全て獣の物です。決して、人のものではありません。

それを踏まえても、この光景は異常。血や肉を目に移すのが苦手な人や免疫のない人はみない方が思われるほどの残虐で酷たらしい光景。

異常な光景でも僕たちにとっては、いつの通りの景色。
慣れれば、それまで…でも、僕は初めから慣れていました。
その理由はおそらく、遺伝だと思う。大抵の人は、皆、こんな景色ばかりしか見ていない。
だから、遺伝子から慣れていましたのだと思う。
いきりためですからね。獣殺しは、

…
掃除をするとは、この臓物から脊髄までを綺麗に片づけること。
その際、使う道具とは何だろうか？　決まってます。箒です。
箒でこまめに、生ゴミは集めて、袋に詰めるのです。単純過ぎますが、これは掃除であって、アイデアを駆使する場面でもありません。
綺麗に元に、戻すだけですから…

「副部長、集めましたよ。」

イナリグチさん意外にも、部員はいて、さっきまで空気のように関

わっていなかったがここで一人登場しました。
処理班担当のマカルとカイロです。
マカルは女の子で、美麗な人柄。
カイロは男の子で、親切な人柄。
どちらとも、死に対して、全くの恐怖を抱かない。心の死んだ人たちです。
可哀想な人たちです。
家柄が響いて、死ぬまで闘うように産まれたときから、色んな事をやらされてたようです。僕には理解できません。
どうして、死んだ人間を造りたいのかを…
「あ〜、マカルか、すまないがおれは副部長ではない。今日からあいつが副部長だ。分かったか？」
イナリグチは、僕の立っている方向に指を向けた。立っている場所に出はなく、僕に対してだ。
「分かりましたよ。」
必ず、尾語に『よ』を付けるのは、彼女なりの個性の出し方なのであろうか？
気にしても、気にかけても、あの二人は死んでいるので興味が無いが、一応、個性として受け入れよう。
カイロは、独りで会場の草をむしっている。滅多に喋らないのが、

彼の個性と思う。

部活は、部活の為に用意された試合会場が設けられている。
基本ただの空き地に、フェンスで囲ったような安い造りになっている。
土は栄養分が不足して、砂に近い。でも、雑草だけはのびのびと育つ。矛盾しているとも思うし、嫌がらせにも思う。
まぁ、雑草にどんな感性を抱いても、
どう思っても、カイロが引っこ抜くだけだから気にしてはいない。
フェンスに囲まれた空き地の中央には、穴が存在していて、そこから、化け物達が湧いて出てくるシステムになっている。
餌は化け物をおびき寄せるフェロモンのような物で、穴は、森に繋がっている。

と

どうのこうの言っているけど、結局は、暇つぶしの地方が用意した遊具なのですよ。

「副部長、このゴミは、ドコに運べば、いいのよ」

持ち運ばれたのは、化け物が持ち込んできたのであろう、ビデオデッキである。

どうしようもない、普通のゴミだったのでコトヤは悩んだが…

「燃えないゴミと書かれた紙が貼られたアルミ箱に、捨ててきてくれればよいかと…」

これが副部長、初めての仕事だった。

「分かりましたよ。」

テクテクと、小走りでどこかへ消えてしまったマカル。
大丈夫だろうか？　今日は燃えるゴミの日じゃなかったし、とうにゴミ収集車は今日の仕事を終えてるし、と不安をつのらせるが…どうにかなるだろうと、随分適当に決めつけたコトヤがそこにいた。

ふと

「おい、みんな集合しやがれ、今の職場もすぐさま放棄しやがれ、さっさと来い！」

若干、怒鳴りつけるような大声で収集を促すのは、頑固で奇天烈の部長だった。

僕も、副部長気取りを止めて、会長の所へそそくさと、向かった。

「よし、皆、集合したようだな。俺自身は嬉しいぞ。よしよし、みんないい子だ。死んで良い人間なんて、この世にはいない。」

とんでもないことを言うのは、会長の癖だ。大袈裟と言いざるを得ないお人だ

僕はこんな人は嫌いですから、気にもとめていない。

「みんなの本日の成績発表とする。成績発表を言ってから、もう一度、作業に取りかかってくれ、後は自由解散だ。理解したか！」

ただのうるさい人でもある。こんな人が部長だなんて、幸せ者ですね。恵まれてる人ですね。

「では、出だしの一発から、一位を発表したいと思います！」

テンションだけ高い上、発表とか言ってる。一番、早死にしそうな人一位ですね…この人は。

「５２頭で、ダントツ一位のタカキ！です。」

僕の数の二倍はありますね。仕方ないけど、才能には勝てない。超えられない上、タカキ。

武器がＳ字フックのみで、戦う…僕の目で今までみた中で一番の狩人。

ここまで徳化された人には、僕はなりたくない。

「そして、二位はこの俺自身です！」

そうですよね。期待道理でした。期待を裏切ってくれないのが部長と言うのも知っている。

副部長となってなおさら気づく。特性。

「次に、コトシラ弟！頑張りましたね。今日からその努力を認めて、副部長です！パチパチ」

そうですか。嬉しくありませんけど、イナリグチさんが認めるのな

ら嬉しいです。

6

僕の帰路を踏みしめる足取りは、軽やかとはほど遠い、披露の一途だった。

今日の出来ごとは、多いものじゃなかったけれども、多分、大きいものであったであろう。

副部長になって、副部長気取りは止めておきたいからな。
気取れば、僕自身も積み上げてきた物がおかしくなる。
きっと、この後で何か、悪いことでもあるのだろう。

良い事の後に、悪いことが起き得るとは、なかなかあり得そうな物言いだ。

起きると思えば、難でも起きそうだから考えない事にした。

コトヤは、自分の荷物。主に、部活で使われた長太刀だ。
刃物等は低調に取り扱っている。しっかり、スチール製の金物用品収納ケースに収めて、担ぐような形で背負っている。

筋力に自信が無くとも、そこをどうにか、非物理操作でどうにまかなう。
僕の特技たる平均化は、うまく使えば、電車より速く走れる。
様々まばらに、天才だとか、才能が有るだとか言うけど、僕はせこい人間なだけなのですよ。笑えますね。

一人歩きも、寂しいものです。
家に帰れば、兄さんや姉さんが居ます。
兄さんは、僕に優しいけど、姉さんは少し距離を置いてるようです。
二人とも、どうも昔から僕を嫌っているようですが僕は好きです。
家族ですから、
それでも、良い家族でから。

「そう言えば…」

今日は、父母たちは留守でしたね。
なので、今日は僕たち兄姉だけですか…
…たまには、それも良いかもしれませんね。
兄姉だけの夕食パーティーですか。

兄は、酷く憎んでいて、反発的に優しくする。
ちょっと、異質な姉は、僕だけを避けているのではなく、自分以外の人間と接するのが苦手なだけかもしれない。憶測ですが…
それらをふまえて、夕食パーティーです。
コトヤは、気づかぬ内に、家の前に、立っていた。
佇んでいた。

「ここが我が家。」

普通の家だ。感想は以上。
すでに何年も、見慣れた造形だ。

そうですね。家です。

玄関の扉を開いてみせるコトヤ。そして、すぐさま、担いでいた鉄パイプのような武器ケースを靴箱の隣に備え付けの傘立てに立てた。

「ただいま、」

物静かな、玄関付近。台所付近では何かを作業をやっている模様だ。まな板を何かで叩く、音が聞こえる

包丁だろう…

思った。思ったがしかし、誰がその音を奏でているのか…一目にして、見ないと分からない。

誰も返事をしてくれないそうだった。

僕は靴を、足から抜き取り、靴箱へと戻す。

…すると、僕の視覚から、思いも寄らぬ何かが、振り下ろされた。

バグチャグサリ

音は高々だ。

なにが起きたのでしようね？

知りませんけど、分かりませんけど、おそらく…頭が痛い。

痛いだけなるよかった。まだ、許される範囲です。でも、何でしょうね？　頭上がなま暖かいです。

バシャゴリ

首が曲がりそうですよ。痛いとおり越していますよ。死ぬ痛みと同じですよ。

どうにか、誰にか、助けともらいたいですよ。

「あれ？　結構、人ってしないない。生き物だったのか…気絶すらしないな」

当たり前です。僕は、死と紙一枚で、ふれていたのですから、死に筈か有りません。木製の椅子だけでは、死にません。

「なら、これでどうだろう？」

グチャリ

ぐぐぢゃ

僕の兄はなにを考えているのだろう？

まさか、僕を殺そうとしているんじゃ、ないだろうか？　僕は腹部をえぐられても死にません。処置をしないと死にますけど。

「兄さん？　なにしてんですか？」

僕は一言訪ねてみる。確かめる方が早いからだ。なぜ、木製の椅子の破片で、腹をえぐるのか…疑問です。

「てか、お前の心境が、なにしてるんだよ。お前本当に死ぬぞ？」

ぐぐぢゃ

ぐぢゃ

ずすず

引いたり、伸ばしたりしている。なにも感じない僕は、本当に死なないじゃないかと思った。
しかし、

「何やっているの？　コトシラ、そんなんじゃ、死なないわよ。」

なにやら、杓文字を携えた姉が現れた。
何をするのだろう？

ジャコ
　じゃこ
　　ぐしゃぐしゃ
　　ずすずざくざく

杓文字にこんな使い方有るとは思わなかった…手の感覚がない。
足の指を動かすのが、やっとだ。

「？何か言いたそうね？　素直に言ってみたら？　弟さん？」

僕の機能するはずのパーツがぐちゃぐちゃだ。でも、なんでか…満たされている気分だ。錯覚だろうか？

「が…い……うあぁぁ」

言語がままならない。その理由は、もしかすると、僕の機能するはずの人がぐちゃぐちゃだからだろうか？　きっとそうなでしょうね。
うまく喋れないのはそのせい。

もう喋ろうとも思わないけど。

「ここまですると、虚しくも思えるな。人って、死ぬと努力も無くなるから、困る」

かといって、生きすぎるのも困る。

これ、僕の意見ね。

もう、僕は手遅れだと踏んで、何もしなくなった…姉も、兄も、…ただ杓文字だけが喉元に突き刺さっているだけだった。

「殺すがは、消費者と同じ考えだかからね。提供者や生産者の方が難易が高いのかもしれませんね。」

なにを言っているのでしょう。姉さんは、僕は百円均一の玩具ですか？

そうか、その程度だったのだと、うん、すっきりしました。

さようなら。

コトシラの弟は、死にました。

数分後。

「こんな、あっさり、死んでもいいのかしら？　もう少し、あらがってもよかったのにね。」

「ひどい事言いますね。実質上、ひどいなどと言う言葉を使えない立場では有りますが、」

俺たちは、残飯処理と同じ事をしていた。人間で。

「早く死んで欲しかったと、思っていたでしょ？　本当は、」

簡単に死んでくれた所為で、杓文字でも人を殺せるんじゃないか、と仮説が実証され始めましたね。

けども、

「思っていた。思っていたけど、逆に、弟にしては、かなり早すぎる死だとは思います。『あの弟が簡単に死ぬはずがない』そんな感じです。ぜ」

基本、おれより、力のある弟がなぜ抵抗しなかったのか…そこが難点である。解けない謎、大袈裟か…

「早くしにしすぎたってわけ？　理想じゃなく、現実で？　う～、あなたの考えが分からない。」

「どう言うことですか？　例えば、なぜ抵抗しなかったのか…の部分ですか？　疑問ですよ」

人なら、死ぬと分かってて、わざわざ、死に急ぐなんて、頭が可笑しいとしか思えない。

「簡単な話よ。『彼はあなたの弟』で居たかったのよ。」

あ、思い出した。

兄は家に帰ると、弟を虐めるのが日課だと、殆どの兄が言っていた。

つまり、虐められないの弟じゃないと言いたいのか…

いじめの範疇を超えてるけど、

「弟だから虐められると、そう言うことか？　姉」

「それも一理あるけど、気持ちよかったんじゃないの？　ただ単に…」

「え、なにがですか？」

「殺されるのが…かしら、」

真面目な弟だとは言っていたが、虐められるのも、真面目に受けなくともいいのだが…

仕方ないか、弟出し。

ゴミ箱にしてた。弟を

7

「でも姉、僕が風邪で苦しんでいるにも関わらず、平然と看病を続けるなんて…第三者の視点から見てみれば、ただの傍観行為と苦しみ見せ物にしかなりませんが？」

意味のない言葉で冒頭を構築する。
冒頭部分を意味の意味の無い言葉で構築したがるのはおれの癖である。

「何を言っているのかしら？コトシラ。…人の苦しむ姿を見るのは、それを見ている本人でさえも苦しんでいるように思えるの、そして、苦しんでいない感じ…」

つまり、『うわぁ～痛々しい…』と感じるそれを楽しんでいると言うことですね。
よくわかりました。

「姉の台詞を頼りに、おれも、姉が苦しんでいるとき笑うことにしました。」

決意を改める。俺も、最低でも最悪な人になってしまったため、考え方や信念を変えるないといけない。
まずは、悪い人間のなり方を身につけないと、

「良いわね。…なら、あなたが死にそうな顔して、地べたをはいずり回っても、私は平然と熱いお茶をすする事にたわ。」

姉らしい苦しんでいる者への見方だ。
そしておれは、笑いだけで。
姉はお茶をすするだけ…

「…そう言えば、今何時です？　おれ腹が減っているのだけれども、」

別に腹が減っていることをアピールしたいわけでは無くて、時間が気になっただけです。

「時間的に、7時…腹が減ったのなら、先ほど作っていた作り欠けのピザがありますよ。」

と姉が言うが、おれは全身とはいかないが、ほぼ全身血まみれなため、風呂に入るのが先と思われる。

「ああ、わかった。風呂にも入りたいから、台所のピザをつまみ食いして、風呂にはいるよ。」

玄関で後片づけをしていた、姉とコトシラだったが、俺の方は血吹雪を直撃したあげく、姉のように、エプロンと言う防災服を装備していなかった為、本当に血塗れになってしまったのだ。
風呂場で服もついでに洗わなくてはいけない。

遣ることは、沢山ある。

「私もお風呂に這入らせて、…嘘です。」

なんと言ったのか、聞き取れませんでしたが、姉が言った台詞は恐らく、『生焼けのピザで腹を壊さないでね。』と言ったはずだろう。

おれは、テクテクと擬音をまき散らせながら、台所脇の風呂に足を踏み入れた。
勿論、ピザをくわえながら、

コトシラは、洗濯機が合ったり、洗面器が合ったりするスペースに、たどり着くと、すぐさま、みる限り血まみれな身にまとう服を風呂場のタイルに打ちつけた。

ベチャリ

微々にも、妙に生々しい音が風呂場に響いた。少し自分に対する罪悪を計っているようにも感じられた。

「とりあえず、タワシなどで洗っとくか…」

衣服の繊維も考えず、タワシを使用すると宣言した。一種の物への苛めです。
コトシラは、そう決めると、どこからタワシを手にとり風呂場へ向かった。

がらがら

左でがらがら鳴るスライド扉を閉める。
密室と化したシャワールームは備え付けのハンドルで一気に、煙る蒸気で空間を満たした。

シャワー

水圧を血にまみれた衣服に、与える。
あり得ないと言うばかりに、血と水が混じり、密室に弾け飛ぶ。

「あ、ぇえ、あろ」

言語障害を起こすほどの水圧。爆弾と同じ威力か、最低でも放水車のそれほぼ同じ力を誇っている。
ノズルを持つ手がガクガクだ。

それでも、強烈に悶える衣服をこれでもかって言うほど、タワシで洗う。

ワシャわしゃ

凄まじい勢いだ。今でもこの左手が、身震いして、…保っているのがやっとと言える。それでも、それだからこそ洗う。弟の血を根こそぎ荒い。弟と言う存在を無かったことにしてあげる。
これが唯一、俺が弟にしてあげる行為だ。
許せ弟、なんて生暖かい言葉は掛けたりしない。おれは、なま暖かいような言葉を与える人間ではないからだ。おれは、俺の出来る最大の厚意…つまり、弟の染み着いた衣服を洗うことに繋がるのだ。

おれは、弟が憎かったから、殺した。弟は兄に従わなくてはいけないから死んだ。そして、弟の存在を無くしたいと思えば、…弟もきっと、分かってくれるはずだ。

これはあくまで弟のためなんだ。

数分後、コトシラはその活気と勢威を使い切り、疲れ始めていた、言うなら朽ちていた。

シャワーのノズルを壁のあのソケットに掛け、品もなく、口に水をためていた。
これでもか五年生だ、…まだ許されるはず。
そうコトシラは思った。

「湯に浸かるか…」

なんだか遣る気のでないコトシラは、その巨人のような足取りで湯船につかる。

まだまだ、呆けている。あどけなさが残るコトシラでも常日頃の教訓を経て、日々進化している。
その先にあり立った物は、殺人出したなんて言えない。親にだって言えない。
姉にだけは言えた、逆に、姉がいなかったら、いつも通りの日々を過ごしていた。
誰もが言う、退屈な日々に

何だろうか…体は暖かくても、心は寒いようなこの感じ…

後悔している？

とでも言うのだろうか…
言うのかも知れないな。

後悔先に立たず。
後悔する理由は一つだけ、冷静に考えてしまうからだ。

冷静に考えなければ、人は早死にするだろうし、自制心働かずに私利私欲に動いてしまうと、世界が驚異の竜巻に飲み込まれてしまう

であろう。

最後はきっと自滅。

良くできてるのか、適当に出来ているのか、分からないな、この世界。

進化し続ければ、先がなくなるから自爆。

退化し続ければ、言うまでもなく無くなる。

きっと誰だって、最後に行き着く理想は、普通や平凡なのであろう。

「つまらないシステム」

こう考えてくると、今度は逆に後悔をしたくなるじゃないか、本当に…

多分、この調子で殺人を続ければ、大量殺人者とか言われたりするのだろうか…人の未来を奪ったり、その人に関わり人間までの未来を奪ったり、…

恐らくおれは、姉を殺してしまったら、終わりだと思う。

生きてる人はみんな、終わりがあるから、俺にもきっと終わりがある。

自覚がない。

もしかすると、俺に末期の癌が見つかって余命なんか月とか、医者に宣言されたら、自覚するけど、…死ぬ瞬間って何が見えるのか。

ああ、また話が大きくなりそうだ止めよう。

とりあえず、次、殺す人間かは親だと言うことは、決まりだ。
弟が居なくなって真っ先に、気づく人間。
おれを形作ってくれた人。

コンコン

すると、外から密室の空間に、ノックを下す音がした。

ふと、

「なんですか？」

意表を突かれた感じに、間抜けな感じで訪ねたおれ。

「私だけど、ちょっと質問をして良いかしら？」

姉でした。
おれは、ほっとため息をつき…別に、誰か違うお人が訪問しに来たとは思わなかったけど、…安心感があった。

「なんでしょう？　質問とは、ここで話すってことは、それほど重要視無作為…」

火照って、言葉が可笑しい。
けれども、冒頭部分だけで話が繋がったらしい。

「あの弟の袋なんだけど…」

弟の袋とは、主に黒いビニール袋だ。破けやすいのは確かだ。

「袋がどうした？」

「ないの。どこかに、捨てたの？」

「無くなったのか…なら、それはそれで処理の手間が省けたな。気にしないで置こう」

きっと第三者が丁寧に、森に捨てに行ったことを祈る。

8

「どこに、ゴミ袋を捨てたの？コトシラ」

おれに問いかける姉。正直真実を言って、おれはゴミ袋の在処など知らない。なのだが、姉はおれをとやかく、しつこく訊いてくる。おれには、俺の対応の仕方と有るが、風呂場まで入り込まれてくると堪忍しきれない。我慢の沸点だ。

タイルに転がっていたポリバケツなんかを転がしたときは、最後となるだろう…姉。

僕がせっかくにも、冷めきったお湯を盛大に頭からかぶるのを楽しみに、冷ましておいたお湯だぞ。ここまで冷めるのに何分かかかったと思うんだ？　１０分弱か、１５分強か…

とコトシラが被害妄想に浸っている、さなか、満を持して、案の定。

「あら？　コトシラ、これは何？」

ポリバケツに触った。と言うか、触れて中の貯水された水まで触れて窘める。

「ポリバケツ触るな！」

思わず口から零れ出た叫びだった。

これでお障りを続けるのなら、おれは、おれの拳で姉を殴り殺すかもしれない。

「あ、血がまだ、タイルの上に、はびこっているわよ？　流してあげましょう。」

と言うと姉は、ポリバケツに含まれる、ほぼぬるま湯をタイルの上に垂れ流した。

じょっぱー

艶やかな水の滴りと、排水溝へのかすかな轟音とが入り乱れ、おれを破天荒のさざ波に誘ってくれた。

「これで綺麗よ？コトシラ」

姉そう言うのだが、
妖艶までの凛々しさが俺をことごとく、鬱伏せる。

「う、うん、綺麗だね。タイルの美しくなったし、それに、姉もとっても美しいよ。惚れてしまいそうだよ。大好きだ。」

言葉とは反比例とおれの心は、紅蓮色一色。いまにも、口からさっき食べたピザが吹き出しそうな勢いだ。

おれの…楽しみが…

もう怒りを通り過ぎて、姉の胸に飛び込んでしまいそうな勢いだったが、今のおれは全裸で防御力零度だ。それに、裸で姉に飛びかかるなんて構図、恥ずかしすぎて、生きてられない。
…それに連動して、恥ずかしさのあまり、姉を殺しかけない可能性だって、零ではないんだ。殺しかける方が断然高い。
もうおれは、人を殺める事に対する罪悪感への免疫力がついてしま

っているのだから…

「あなたの性癖なんてお見通しなんだからね。あはは」

何を言い出すかと思えば、これまた、心無き心を抉るお言葉。この人は、本物の姉なのだろうか？　先ほどの『袋が無くなったゃってるわよ？』辺りからから別人へと進化しているのでは、なかろうか？

いや、専ら嘘ですから、本物の姉ですから、根強く許してあげましょう。

「一言言いますけどね？　姉、おれは最後の一時に、盛大に頭上から冷たいお湯をかぶってまた、湯に浸かるのが趣味だったんです。…どうしてくれます？」

許すけど、詫びたる見返りは求めます。おれは悪い子ですからね。

「まぁまぁ、コトシラ？　あなたは何かを知った気でいる様だけれど、私はあなたが風邪を引かない為にも、やった姉の思いやりだったのよ？　それに、あなたは風邪で一度死んでいます。」

最後の締めくくりが妙に悪寒が走る。

彼女曰わく、姉は何を言っているのでしょう？　…触れないでおきましょうね。

「おれは死んでなんかいないし、この程度で風邪を引くとは思わない。…現に、今の今まで続けていた習わしだ。耐性はしっかり、保たれている。」

風呂場のタイルに裸足で姉が立っていて、おれがそれを見上げるよ

うな立ち位置だ。おれは、浴槽につかるだけだ。

「…あら…そう、そうね。自分のことも大切に出来ないから、人を葬ることが出来た。あなたは立派な殺人者よ。そして、私も…だから、まず取り敢えずは、体だけは大切にして、お願い。」

ん？実にさっぱりしない言い回しだ。元々から何か、抜けているような物言いばかりする姉だけど、ここまで解読困難な出題はあっただろうか？

要は、今後これからも殺人に没するおれたちは、体調管理をしっかりしろと…そういいたいのか？

…矛盾だらけだが、姉らしい意味合いではある。

「う、うん、わかりました。おれはこの日から、ぬるま湯を自虐的にかぶるのをやめます。」

その代わり、おれにも端的に提案一つ述べて頂かせて致します。

「…その代わり、教えてくれませんか？」

腑に落ちない事がある。

「何かしら？　唐突に…」

「どうして、姉はこの浴室の敷地に入ってこれたのか不思議なのです。教えてください。」

しょうもないこと言うのがおれだった。

「どうしてって、それを今ここで、そして、交換条件で訊いてもい

いのかしら？　損しますよ？」

それでも、無償に聞きたい。なぜ、その様になってしまったのかを、普通自然界ではおかしいこの状況を、

「あなたがこのような趣味趣向も持っているのかと思ってたけど、違うの？」

「え、よくわかりませんが…」

「なら、これは癖なのね。悪い癖」

「に、日本語で喋っていただけます？」

「鍵は、かけるべきよ？コトシラ」

「えぇ？！、鍵が最初から開いていたんですか？！」

「掛かってなかって、言ってくれる？」

おれは驚いてた。否定、驚かされた。驚愕の一途を辿る。まさか、生まれてこの方１１年間、その癖が定着してなんて…
道理で、ゴミ袋も盗まれるはずだ、…そして、盗んだのは犬だな。
事件解決。

「なんだかありがとう、姉、おれまた生きる勇気を貰いましたよ。」

「手遅れだけどね。」

その通り、手遅れだった。手遅れでもいい、所詮、後先後悔するも

ので過去は変えられない物なのだから、

「手遅れ、…手遅れなら、告白しても良いかな？　姉」

「言ってもいいんじゃない？　私自身には、どうでも言い話だけど…」

「どうでも良いならやめます。そして、そう言う姉が大好きだ。結婚してくれ」

浴室でなんてことを言うのだろうかと思えば、年齢的に全然許される領域じゃないかと、抑制効果。

「言うことはいったの？、なら、用事は済んだと思うので、行くわね？」

あっさり居なくなってしまった。

と、おれもなんだか興ざめで、これ以上浴槽に浸かることはないなと、最後に色々済ませ、浴室に手をかけた。すると、不思議なことに、鍵が掛かっていた。内側からしか掛からないタイプの奴で外側からは、十円玉的扁平な道具を取り扱わないと開かない構造になっていたのである。

それを外側からなんの仕草もなく閉じたってことだ。

「手品か…いや、魔術だ」

杓文字といい、この手品といい、彼女には何かの力を秘めているというのか…怖ろしいを通り越して、一度で良いから杓文字で殺されたいと思った。

と、同時に、『おれの殺害者は姉で凶器は杓文字だ』とも、願った。叶わないであろう夢である。

コトシラは、いつもそこにある、パジャマに手をかける。パジャマと言うから、それらしいものだと思えば、ただの黒一色の闇に埋もれた色彩の服装だった。

黒い服はよく寝れるの理由で、母に買わせて貰った。何着も予備はある。

それにもう殺人者なら、こんな言葉たって使える、「ついても血が目立たないからな…」。

いかにも、犯罪者って陰気がぷんぷんするから、言わないけれども、なんとなく、黒は陰鬱で灰色だ。

いかんいかん、言語が誤った。今日はもう疲れているみたいだ。

「今日の夕食は何かな〜」

過った言語で陰鬱で灰色と、脳内で肯定してしまったが、おれはそんなことより、姉の夕食が食べたいと思った。

コトシラは歩く。床を

9

「美味しいかもしれない」

夕食は、語彙では伝えられない何か。しかし、その食べ物は思っている以上においしかった。

「初めて食べる人はみんなそういうわよ？　あなたも一般的な味覚の持ち主だったのね」

と姉は言うが、それは正しい発言かもしれない。おれは、初めてみるこの食べ物を非難していた。見た目がとても不味そうだからと言う理由だ。でもしかし、こうして食べてしまって、うまいと評価するおれは、単なる食わず嫌いの考え無しって人種に分けられそうだな。

それを一般的と評す姉は若者、おれはまだまだ子供だ。

そうやって、食卓に出された食べ物を味わいながら、この食べ物の原材料を訊く。

「これ？　何使っているの？　病みつきになるほどうまいんだけど…」

何をこの食べ物に交合したらそれだけ、うまくなるのか知りたい。

「ふ～ん、知りたいんだ。」

姉は僕の顔だけ見つめて、手を食卓に乗せ、上半身もたれかかる。だらけているというのか、サボタージュしているのか、とてもだらしがない。

「知りたいですけど、どうにか、その凭れ掛かれ感どうにかしてくれますか？　誤って、姉の顔にこの食べ物が掛かってしまいそうです。」

だらしがない姉みるは、気か引けるが案外それでも良いかな？とか思ったりする。そもそも、気にする方が可笑しい。

「…どこまで知りたいの？　この食べ物の真相をどこまで知らしめたいの？」

それは姉が知る限りすべてだと思いますが、おれには、話を聞くだけで何かが滅んでしまいそうな…そんな根拠のない予感までもした。

「全部。と言いたいけど、何かが怪しいんですよね。」

警戒しつつも、軽快に答えた。

「何か、知ることに躊躇っているの？　大丈夫よ、別に、人肉なんか使っちゃい無いわ。」

「それです！それですよ、おれが気になっていた疑問は、…弟が入っていたら、どうしよう…とか思いしたし」

安心感、弟を殺したおれでも弟を食べたいと思うまで落ちてはいない。おれは只、弟が憎かっただけだ。好きだったわけではない。どちらとも同じコトを言っているようだが、否定を押します。

「材料に加えようかな、と思いはしたわ。けど、コトシラのコトだから、ここは避けようと思ったの。」

弟思い！　けど、おれは弟殺し。

「考えているのか、姉には勝てないよ、一生。」

姉はやれば何でも出来そうで、完成された人間だと思っていた。けど、それをうまく利用できていない気がする。人との関係だけが最大の難点と言うか、それが全部を駄目にしているというか、動ける世界を明らかに狭めてる。

この場合、人間関係と言うより、人間恐怖症と言うべきなのかもしれない。

おれは、わざわざ人間との距離の取り方から観て、人間関係と言っている。

「？勝てる日が来るんじゃない？　一生なんて言葉がより説得力を低下させている様なものだし。」

一生って言葉は、重い言語だと思ってたが、違ったみたいだ。

「じゃあ、勝てない、二度と」

お世辞まめれな口語を並べるけど、それだけ姉を信頼し、認めている。

「下手なお世辞は止めなさい。照れてしまったらどうするのよ？」

「どうもしません。」

照れてしまったら、おれが殺します。

そして、コトシラは食べ物を食べる手を早める。

むしゃむしゃ

「ごちそうさまです。姉?、姉は食べないんですか?」

何となくだらけている姉に訪ねる。

姉が食事を行っている姿を今まで観たことがないから、どのタイミングで食べているのか気になる。

「え、私はいらないわよ。その食べ物不味いから…」

「自分が不味いと感じる食べ物をおれに食べさせたんですか?!」

衝撃を受けた。どこに衝撃を受けたかというと、ここまで美味しかった食べ物を不味いと言う姉に驚かされた。

「大丈夫、心配しないで、毒味はしていないけど、食べても腹痛や死んだりはしないわ。完全に安心できる食べ物よ。」

「姉も食べてください。是非」

「嫌よ」

おれは腰掛けてた椅子から立ち上がる直前に意表を突かれたため、

上から姉に怒鳴ってしまった。それで居て、姉は食卓に置かれていた歩く玩具のねじを回し、歩かせ横から見ているだけだった。

観ていると本当に、気力が感じられないので、

「おれが、皿を洗いますね。姉ばっかり頑張って、ずるいですから」

コトシラはそう言うなり、てくてくと、台所の流し台に向かう。

「あ、コトシラ。コトシラが洗ってくれるの？　助かる限りね。流石は私の弟」

などと、気の抜けた生気のない一言を歩く玩具に言った。

…顔見なくとも分かる。姉は目が虚ろな彩りのであろう。いつもそんな感じだから、おれには分かる。

「姉、眠いのなら、部屋にでも籠もって、眠っていれば良いじゃないか？　疲れているようだし。」

人といるだけで疲労がたまる姉の体質もそうなのだが、こんな体質にした親共が憎く思う。

想わないようにしているのだが、おれは姉が好きだ。

親を殺してしまうくらいに、

「そうしようかしら、もう少し頑張ってみようしたけど、無理みたい。」

弱々しく姉が言うと、覚束ない足取りで、部屋へと歩く。

ふらふら安定感のない足取りに、不安が残るが死ぬわけではないので、そっとしてあげた。

おれは、こうして、皿を洗うことに没頭したのだ。
姉が部屋に戻った後、おれは皿を洗うついでに、ゴミを出すことにした。
夜に、ゴミを出すなんて、おれらしくて、良いと感想を言ってみた。
静かすぎる家の中、玄関へと続く廊下板を歩き、ゴミ袋を片手で運ぶ。
外は勿論のコト、暗く街灯と住宅の光しかない。外は曇りで月も目に映らない。
靴を履いて、外に出たコトシラは、弟のしなんて、無かったように歩いて見せた。
いつもどうで、何もなかった日常となんら変わらない表情で…
歩くのを繰り返すコトシラは、近くにあるゴミを集める場所にたどり着いた。
なんら、中途半端な季節だったため、黒服パジャマだけで、ここまで歩いてきた。
辺りに人の気配なんて無い。この時間帯は、いつもこんな感じな為、何かを予感させる違和感なんてものはなかった。
けど、逆に当たり前すぎて、俺自身が異常なようにも見える。
それも当たり前だ。おれは人を殺したのだから…
「ん？」
ふと、ゴミを捨てる場所に、何やら、観覚えるの有るゴミ袋が目に映った。

弟を詰めた黒いビニール袋だ。

どこかの国なら軽く、死体詰めの袋を遺棄してしまうと、すぐ見つかってしまうのだが、この世界は人が死ぬのが当たり前で殺した所で別に、そう言った重い罰を受けるわけではない。

この世界のルールは、人を殺せば、殺した人間を殺しも良いと言うものだから。

おれはもう、誰かに殺されても、その罪を向ける人間はいないってコトだ。

よくできたシステムだ。その所為あってか、殺すこと事態が馬鹿馬鹿しいくなってくる。

人の値段が下がると、技術も進化しないって言うけど、本当に進化していないよ。この世界は。

この俺が住む国の王様だって名前も知らないし、ここが国という敷地に囲われていたことだって、つい最近知った。

とそんな話はいいんだ。

弟の入ったビニール袋がなぜ、こんな場所に合るのか、

一番その疑問が知りたい。

10

どうして、ゴミ捨て場にゴミがあるんでしょうか？

なぜ、このゴミがここにあるのでしょうか？

このゴミは、ここには在ってはいけないもの。

何故なら、これはゴミではなくて、先程まで家族だった物だからです。死んでしまったら、家族ではありません。只の死体です。動いたりしないから、只の生ゴミです。

そんな事は分かってはいますが、どう考えても物理的に不可能なはずですし、第三者がいるとして、ここに捨てる意味が分からない。

どうして此処だったのか、何故、おれがこれを目撃したのか、意味が分かりません。

言うなれば、これは異常現象。台風がこの町に襲来するのよりも、もっと低い確率でこのゴミと遭遇。陰謀としか思えない自然現象。

頭がおかしくなりそうだ。

違った、頭はすでに、おかしい所まで落ちている。人として人で無しなのです、おれは…

いかに巧妙なトリック？　有り得ません。これは、偶然と解釈した上での運命です。

こうなるように、企みが闊歩したのですね。誰かが、

疑われるのは、姉。でも…
おしゃれな割烹を着ていた姉がここまでの距離、運びに来るのだろうか？

時間的に余裕が無い。姉は俺が体を浴槽に浸していた際、おれの様子を遊び半分で伺いに来ていたのだから、そんな暇は無かったはず。…あの食べ物だって作るのが無理に等しいくらい俺と話をしていたはずだ。

「考えて無駄だな」

今まで、何を頑張って、頭を働かしていたのでしょう？
そこに死体があって、死体は歩かない。此処にあるのは自然界的不可能だ。そこに在るのは良いとしよう、そうして、今日偶々見つかると言う低確率の遭遇。

考えて、解決しますか？
しませんよ。おれは、探偵ではありません。殺人人間です。

壊すだけが取り柄となってしまったのです。

何も知らずに、芸術品を意図もたやすく壊す赤子。知らないから、分からないから許される。
知っていて、物の価値が分かるのに、壊す愚人。言い切りたくないけど、他人ならそう言う。

コトシラは、何事もなかったかのように、くるりと状態を翻し、もと来た道に目を向ける。
さっきも、解説したけど、空は曇りだ。星なんて見えない。星が見えても、無数の光は、目に映るだけであって、光を映し出されてい

るだけだ。…つまり何が言うたいと言うのならば、結局、いつも観ている夜空しか、そこには無いって事になる。

いつも通りじゃなかったのは、曇りの空の方でした。

「暗いな。街灯の光が眩しいくらいに…」

街灯は、ほぼ同じ等間隔に配置されている。車はいっさい通らない、この道は、歩行者専用となるのであろう。整備してくれたおれの知らない人たちの力。今、ぽつりぽつりと、転々としている街灯たちに便利さと有能さを感じられるのは、人たち先人の知恵と、この今の状況下が…ピッタリ、リンクしているからなのかもしれない。

誰もある来やしない、道に街灯などと、電力の無駄遣いだろ？
あ、いや、ゲームする事態、電力と社会的時間の無駄なのは知っているよ。

…要は、今現在のおれが便利だと思えればそれでいいのか、街灯ないと怖くて道歩けないし、外にでるのも恐れるよ。

コトシラは、歩くペースが行きよりも帰りの方が早いことに気づく。気づくけど、ゴミを捨てて何も負荷が無いことに、改められる。

どうでもよかった。

体が軽くなったというのなら、大袈裟だけど、確かに、歩く歩幅と歩く速度が上がったと言えば、上がっている有り様だ。

ゴミを捨てるだけで大層に、変わったりするのならば、おれは此処でこんな事をしていなかったのかもしれない。

人が人として、誰かのように変われたら気が楽で、今までのように、人を殺めたりなんかもしなかったはず。

確信はないけど、保証はできそうだ。

歩くのは楽しい筈なんだけど、雨が降ってきた。初発から、雲行きが怪しかったが為の行いともいえる。

そうは言えないけど、何となく感じるそれだ。

「やばい、濡れる」

いきなりの事ではなく、前々からぽつりぽつりと、街灯と同じテンポで降っていたのは、今更ながら解説させて貰う。

雨が降っているのだ。

走って、さっさと帰ってしまえば良いものを、あのゴミ袋ごときで、はばからったのは確かだ。過去に失墜を覚えるのは、しゃくに下すので、省みない事にした。

今してみた。

雨に濡れる。

まだ、本調子じゃないので、まだまだ安心だ。安心できる。安心しないといけない。風邪をひいたら、姉が困るであろうし、おれも困る。

明日は、親を殺さないといけない大事な日になるし、哀れに風邪をひいたら、姉だけ頑張ってしまうし、活躍もできない。

雨で頭が濡れるの事態、危険性があってやっかいなのに、どんどん

雨が降ってくる。

「本当お願い、黒いパジャマがびしょ濡れになってしまうよ」

貧弱で軟弱な言葉を雨の夜空に訴える。考えるまでも、想像するまでもなく、雨はコトシラの体を容赦なく叩きつける。

もはや手遅れ、討つすべ無しに見えたが、一つだけ提案があった。

「家って、こんな近くにあったの？　驚きが舌包みだよ。」

我が家に潜り込んだ。

本当に近い場所にゴミ捨て場が在ったため、雨が降ったところで申し分ない距離を誇っていた、我が家には流石の天からの濁流も討つすべあきたらずって感じにまで、無能だった。

雨が下す、天罰はおれには無効と言いたかったのだけれども、頭半分は湿っていたので互角と判断された。

俺自身に、

突き当たり、角を真っ直ぐ行った先にゴミ捨て場は存在するから、もう、一言ですごく近い。

何、長々と歩いていたのか？　語っていたのか、自分でも分からない。だけども、

頭は濡れている。

「頭半分ごとき、気にするにも当たりないわ。」

おれは、頭が絶妙に湿る髪をカサカサと書き散らし、自分の寝室に

足を進めた。

俺の部屋…とは、言いたくもないが、言うしかないのかもしれない。弟が死んだ、この事実を直視するのなら、おれの部屋になったのだと言おう。…けど、おれは自分専用の部屋なんか欲しくないし、一人では夜、寝るのが寂しい。
今更は、絶対的に今更なんだから、どうする宛もない。

おれは、弟は憎かったが、弟の温もりは好きだった。

全く、専ら、聞く話、兄より弟の方が賢く大人びると言われるが、言われるとおり、弟は俺より大人だった。
落ち着いていて、人思いで、みんなからも親しみ敬れていた。言葉は変だが気にするな。
んで、おれも寝るときは必ず、弟を枕にしたり、抱き枕にしたり、ベッドにしたり、日々、充実した快適な眠りについていたのだから…みんなのヒーローと恥じるくらいの存在だった。

おれが殺したけど、もういないけど、ただの人肉になったけど、

弟は、おれにも絶大な何かをくれた。

コトシラは、自室と化した、部屋に足を踏み入れ、電気をつける。

パチ

すでに、寝る支度は整っていた。皿を洗い、歯を磨き、うがいをして、手を洗って、ゴミをゴミ収集所に置き、雨に濡れ、そして、寝室である。

此処までの道のりですっごく、どうでも良い話をしたのは、街灯だった。
日記に書こうかと思ったけど、ブログに書くことにした。…てか、ブログにもかけないか…ネット環境整ってないし。
ついでに、言うと髪の毛も湿って整っていない。

「寝るのが寂しい…」

静まり返る寝室は、凍てついた雨の音と同化して、凍りついた雰囲気を醸しそそり出していた。

『寝るな』と悔やまれるくらい。『寝たら死ぬぞ』と、甚だしく罵られるくらい。

寂しかった。

11

人の殺せる世界に誰がしたんだ？

僕だって、そんなのいやです。

殺されるのは、構わない。だけど、殺す人間の方がかわいそうだ。

人を殺したから何だというのですか？

僕は思います。殺される人間はどんな理由で殺されたのか、知りませんが、殺されるのは本望だと思うのです。

人は、死ぬのが当たり前ですから…生き物は死ぬのが当たり前ですから。

どうでしょうね。死なない人の気持ちは…

問題なのは、殺した人間を生み出すこの世界だと思います。人が悪いのか？　いや違います。

環境が悪いだけなのですよ。多分、…

人は環境に適合し、人間関係も、人々つながり合いで変化する。

僕を、選んで殺し人が可哀想だ。

どうにかならなかったのでしょうか？　助け舟を彼に譲る人は居なかったのか、…彼と言っても兄だけど、

本当に残念な気分にさせます。

死ねない僕も、殺した兄も、

どこまでも、甘い姉も。

僕が死ぬとでも思って、殺していたのなら分かります。しかし、姉は何故、僕が死なないことを分かっておきながら、僕を殺したのでしょうか？
疑問です。

兄も兄で、僕を殺す理由が分からない。殺すまでに憎かったとして、実際に行動に起こすとは思えません。

…今の状況からは説得力がありませんが、それでも、姉が凶行を促したとしても、兄が兄自身の決断で僕を殺すとは思えない。

僕の兄は、人を殺すような人ではないと思っていた。
この信憑性のない言葉は、僕が兄を信頼して、信用していたからいえる答えで、僕自身が兄の弟だからたどり着く答えと思っていた。

僕は兄を殺してしまいたいと、思ったことはない。
僕はいつだって、どうにかやってのけたから分からないのかもしれないし、人の心をすべて理解するとこさえも出来ない。

今までうまくやっていたのは、僕のおかげですらない。
うまくやっていたのは、偶々だった。偶々、成功して、偶然、此処まで成り上がってこれた。

僕は人気者でも、勇者でも、選ばれた子でもない。ただの凡人だ。
死なないだけの只の凡人。

死なない事で、すべてがうまくいっていたのかな？
簡単に死ぬ人間は、選ばれたり、勇者だったり、人気者で在ったりするのかな？

分からない。ますます分からない。

ザザー

外は雨が降っている。外というか、袋の外側。
僕は、袋の内側にいる。
僕の次の人生は、袋の中から始まるらしい。
狭いし、息苦しい。でも、死ぬわけでもないし、外にでると雨で濡れる。
これからどこかへ、行く宛もないし、僕はそのままで居た方がいいのかもしれない。
考えた先には、そのまま居続けるに定着したらしい。僕はそのままだ。
動く事しらすない。

雨で、袋の外側をうつ。触れているような感覚で、塗れているようにも思えるのだが、実際は触れてもいない。

どうしてか、寒くもない。感覚が麻痺しているのか、また死んだのかは、別の話だが、とりあえず、じっとしておこう。

何もなくて、何も見えなくて、何かを考えているなんて、最悪だな。
僕の人生は最悪だ。恨む訳にもいかない。恨む対象が分からないから、
誰に、せがめばよいのかも、分からない。
分からなすぎる。何も、知らなすぎる。
一つに、何度死ぬ苦痛を味わえばいいのか、分からない。

僕は、どこに進むべきなのか、分からない。

僕は、今どこにいるのか、知らない。

勝手に決めても良いけど、絶対に違う場所を断定する。正確さを求めたいのなら、この目で確かめればいい。今いる場所だけは、掴めるはずだ。

どこなのか分かるはずだ。

でも、雨には濡れたくない。

風邪など、ひきたくない。その前に、ひかない。

ひかないのだけれど、常識を考えて、雨に自分から濡れに行くなどはしない。

濡れたくないのは、嘘で、本当は。

濡れることはしたくないのが正しい感情。

僕は、常識を正しいとは思わない。

人が迷惑するから、常識を覚えるのは、正しいようだけど、迷惑かけても良いじゃないか。

他人が困り果てようと、自分が辱め受けようとも、その話自体が何だというのでしょうね。

基本、何でも出来てしまい、何だって出来るこの世界で何をしようが、自分のためでしょう。

他人に流されて、他人と同じになって、自分じゃなくなるとか、みんな思っているだろうよ。

綺麗言は、正しくないし、戯れ言は、上辺言だけで中身がないし、一番、より一番優れているのは、理解されない言葉だと思います。

人って、自己中心的だから、他人にも優しくできるように出来る。

自分が大切だから他人を救える。

意味の無い言葉など、この世にはないと、大前提する神様がいるとして、僕なら真っ先に、意味の無い言葉をいいます。

反抗精神とかでもなくて、言われるがままに、こなしたりとかして、他人になってもいい。

…僕は、偶々、言われるがままに、流される人間になっただけですと答えます。

一つ気になりました。

何を語っていたのでしょう？
意味がないことでした。
言いたいだけって感じでした。
僕は、これから何をすればいいのかを、考えればようのに、別のことを考えていた。

意味なんて、最初からありませんでしたね。

僕は、その場でじっとするだけです。
明日になるまで、雨が止むのを待つだけ。…雨が止んだら何をしよう？

一度、家に帰って、兄を殺してみようか？
それは出来ませんね。兄は死んだら終わりで、もう、会えなくなってしまいます。兄の体は腐ってしまうだけです。
僕も人間だから、兄を失いたいとは思いません。
逆に、弟らしく、兄と一緒にいたいし、もっと話したいです。姉だって、僕を嫌って避けているけど、本当は、殺したくなかったはず

です。殺してみたかった。とかは、思っていたかもしれませんが…
コトヤは、袋から外にでずに、ずっと、雨が鳴り止むのを待っていた。

まさか、杓文字でトドメを刺されるとは思いませんでした。木製の立派な杓文字。

中から、刃が出て来るのなら、理解も出来たけど、内蔵を抉り、喉を潰して、気道を阻むなんて…
想像しただけで恐ろしい、技です。
姉はなんで、あんな特技を身につけているのでしょう？
一番の不思議です。死なない僕よりも不思議。

僕は、死ぬほど努力しないと、特技を身に付けられませんし、努力しても限界があります。

しかし、例外が如くでどうしてか、姉は何でも出来る。

分からない。輪廻をわたりかけて、その技術を覚えているのか、はたまた、最初から出来てしまうのか…

凄い以外の言葉はでません。凄いくらいに…
姉は、人間を観察していたりするのかもしれない。兄を利用しているのかもしれない。けども、それは多分ないと思う。

姉がそんなに頭がいいとは思えないからだ。頭が悪いようで、何も欠けていない感じもする。
僕と比べものにならないほど、頭が悪そうだ。家で引きこもって、豆腐や南極などを書いている間抜けさだぞ。驚かされるの何者でも

ない。

曲者だと言いたかったが、姉はそこまで危険人物でもない。遊んでいるだけかもしれない。人生を自分なりに楽しんでいるだけ、僕と正反対じゃないか…

道理で馬が合わない。

そうか、姉はバカだったのか。感心するあまり、涙が出てきそうだった。

姉は姉らしく、そのままで居てくれたらいいのに、兄に変えられてしまいそうで心配だ…

意味など無いけど…

弟はとりあえず、雨が止むのを待つ。

12

朝がきました。

おれは、昨日からよく眠れた感じがする。昨日は、なんだかんだですぐ眠ってしまったし、今日が来るとは思っても観なかった。

あれは夢だったのかと、眠っている最中に、思うくらいだったから、…それほど、今日は普通とは違う今日が来ると、覚悟はしていた。

何でもない、いつもの朝だった。あれは夜だったから、心がテンパっていたのかもしれない。

テンションがいつもと違ってたのかもしれない。

が、言うまでもなく、『弟がいないこと』だけは確かだ。狭くもない二人分だとちょうど良い、この部屋に一人、弟が消えただけなのだから…

消えたのだから、広く感じてしまう…だけだ。後は何一つ代わりのない、毎朝の朝日がカーテンを照りつけている。

それを伺って、朝だと気づく。いやいや、目覚まし時計を観れば、すぐに朝度と、気づいていたが…気分的な悟りを持ちたかった。

コトシラは、敷き布団から体を起こし、上半身を捻ったりしながら、体を起こした。体操とは違って、体を慣らすだけの習わしだ。

「今日は、良いことなさそうだな…」

気分は良好ですが、何か、いつもとは違う調子を掴んだ。

体がダルいわけでもない。第六感が在るとするのなら、そこをくすぐる何かが、…感じ取られる。

正直、生半可な感覚神経なので宛にも出来ない。

「気にしないにこしたことは無さそうだ…」

違和感の深層心理を追求することをやめたおれは、布団から飛び出し脱出した。

そして、三回に畳んで、はい終了。

コトシラ最後に、足で部屋の隅まで蹴り押して、放置した。

これからのプランを考えるコトシラにとっては、こうやって手間を省くのが最善と思えたからだ。

「…姉でも起こしてくるか。」

姉はまだ寝ているか、それとも、深夜から絵を描いているかのどちらか行動種しかない。

あえて言うのなら、姉は、暇な人なのだ。

どちらにしろ、寝るくらい時間があって、絵を描くぐらい時間を持て余しているのだ。

今日は…多分。

「寝ているな。七割型寝ている…」

昨日はあんなに、疲れている顔をしていたがら、打算的にそうなるのが妥当。

こういう場合の対処法は、寝ている姉を起こすのが妹の役目だが、弟でも辛うじて免罪の位置にいるのなら、姉の寝顔でも愚弄してこうか。
と、俺は思う。

姉は、でたらめに紙を布団にして、段ボールの上で寝るから、いつも親父に起こされるんだよな。
母は観るに観枯れて、何も言わなくなった。呆れているを通り越して、勝手にしてなさい、放置、の領域だ。

それでいて、親父は妙に情に厚い人だから、そんな姉を現実世界に引きずり込もうとしているんだとか。観れば、滑稽に移る家族物語だ。クオリティーの高いままごとですね。

確か、に。さらに考えても、今、寝ている。昨日、弟を殺すときに、木製のいすを使って、やったから、姉は作業が出来ない筈だ。いつも使っていた、木製の椅子…砕けるときは潔く呆気なく砕けた。

今思うと…姉はあの椅子を大事にしていたか、愛着を持っていたはずだ。

ずっと使ってきた、椅子だぞ？
おれには、価値が分からなくても、姉なら重みが分かるし感じられるはずだ。

なんて、とんでも無いことをしたのでしょう？

後先考えない俺でも、少し気を使っておけばよかった。おけなかったけど。後悔だけど、あの時は、考える暇もなかった。

…いいや、知らなかった事にしよう。
姉なら許してくれるし、嫌われても、良い。殺してしまうだけだから…

と、おれは、歯を磨いたり、顔を洗ったりして、顔全般を清潔にした。
別に、汚い、汚らわしい顔で目をつむる姉を仄めかしてもよかったのだが、それは、机上の空論のように、叶わぬ夢だ。
姉に嫌われるのは、本当に怖い。
理由、今まで嫌われて、こなかったから、生きてきて一度も嫌われたこと無かったから、本当にシスコンなおれだから、それだけは譲れないのだ。

てくてく

階段そばまでたどり着けば、薄暗い階段が二回へと続いていた。朝日はまるでない。
怖い。

いや、全然怖くない。むしろ、愛くるしい。

とことこ

効果音を撒き散らしながら、一歩一歩、確かに足を踏みしめる。踏み外して、頭打って、死ぬ運命だけは避けてみたい。
その前に、訪れない運命だけどね。

「姉〜」

階段を上る最中に、姉を姉と呼んでみた。声が女々しく、声が届くほどの大声ではなかったため、聞こえてはいない。

只者面で、呟いてみただけです。

姉姉姉。

ようやく、姉の部屋の前までたどり着きました。ゴクリと、開けるのをためらいます。扉に、『あねです』と下手くそな姉の字が掲げられた札が欠けられていました。

中には、姉が居るとして、躊躇う俺が此処にいるのなら、いっそ、あの階段で落ちて死んでればよかったのです。

死ぬのは嫌いですけども、そこまで生きようとも思わない。

心臓が高ぶる？

高ぶったりしないけど、この流れる空気が嫌いだったりする。誇りとか、陰気な廊下とか、錆び付いたドアノブとか、二階の階段と廊下を繋げるこの空間には、窓すら開りません。扉が二つ開って、俺の後ろにもう片方の扉があるのです。

一つは姉の部屋ですが、もう一つは、倉庫になっています。使われない物物が散乱する物置です。

幼い頃中を覗いたりしたことが山ほど在りますが、五年生になったおれはもうそんな事はしません。

好奇心が薄れている証拠。

大人に成っていく、実感…
あ、いや、
おれは、なんて事を思っているのでしょうか？
まだ五年生で、全然全く、子供です。馬鹿馬鹿しいとかその前に、
自分の立ち位置をわきまえていません。

子供ですね。

ガチャリ

勢い余って、ドアノブを半回転しさせてしまった。おれのせいでドアはみる観ると、開いてゆく。

そこには、身を疑う光景が部屋いっぱいに、広がっていました。

姉が死んでいたのです。
血が部屋いっぱいに広がって…

嘘です。普通に床に転がって、寝ていました。俺は何も変わらない姉を観て、ほっとため息をこぼす。

「姉！　朝ですよ。起きてください！」

姉の被っていた、紙の掛け布団を蹴り飛ばして、かぶっていた布団を蹴り飛ばした。

ガシャリ

勢いが加速気味に、冗談無しの慣性の法則だったため、蹴り飛ばし

た紙は立て掛けている筆入れとパレットに衝突した。

姉は一方、ぐっすり死んでいるように寝ています。

「姉～起きてくださいよ。」

おれは、姉のわき腹を握りしめて、揺すった。寝顔が不満そうな顔をするが…

「？レモンティーが、絵の具の代金と差し支え無しで、為替市場上昇気流？」

寝言が飛び交った。

「姉！」

ギュリリ…

わき腹をこれでもかってくらい、殺して内蔵を刺身にしてしまうくらい絞った。

「いたたたたたた、いたいの、止めて…」

起きた。

飛び跳ねるように、起きた。

「起きていますか？　姉」

甘えてなどいない。悪魔で、喧騒と激化する表情を孕んで、訪ねて

いたのだ。

「なに？　いつもと変わらない、朝でも迎えて、寂しくなったの？」

キャラが瞬時に戻った。流石は、姉だ。眠っている時は何時だって、無防備なのに、意識があると人と距離を置く。

だから、親父が弄ぶわけだ。

「寂しくは、なかったですけど、やっぱり、もっと人を殺さないと、実感したりしませんよ」

殺して依存して、早死にするのかもなおれ…

「初めてで、それだけ、心得ているのなら、言うこと無いわね。…合格よ」

あなたは立派な殺人者。

と、微笑ましく、笑いのだ。

あはは、

13

早朝は、早朝で。

親を殺しちゃいました♪

今回は、隣近所に迷惑をかけないように毒物を朝ご飯に混ぜて、混ぜて、安らかに、穏やかに、葬りました。

笑っちゃうほど、簡単に、そして、気がつくまもなく、速やかに逝ったので驚きようもありません。

「えっ、こんなもんなのですか？　普通に最初から、この方法でよかったじゃん。…なんで、弟の時あそこまで難儀な殺害方を企てたのでしょう？　俺たちは馬鹿だったのか？」

親父の顔が滑稽すぎて、呆れるばかりだ。母親は俺たちを生んでくれて、ありがとうの感謝だけで鼻血が出そうな勢いだ。

取りあえず、泣いてみようか？

泣けませんね。弟で泣けない、おれだったのですから…

「このような物なのよ。きっと、大人を天国へ誘うのなら、力業よりもだます方が簡単って事なのね。これで証明されたかも」

と、いつもみたく、何かを計るような言い様をほざく姉だが、今回はバージョンアップしてて、片手に、杓文字と杓文字との個体二つを携えていた。

杓文字の数え方なんて分からない、おれの俺なりの表現だ。

…しかし、天国とはよく言ったものだな。

彼ら、二人はおれたちが出した朝食を何の疑いもせず、迷わず食べて、…あの母の笑顔は脳裏に焼き付いて、食に五月蠅い親父の感想も耳に残って、天国行きは確実な良い人間たちだった。

おれは違う。地獄だ。

姉も、もしかしたら地獄だ。

おれの所為になるのかもしれないけど、協力する姉もまた、姉だ。

「…姉、良いんすかね。おれの寝言を実現しちゃって、…そして、姉まで巻き込んで…」

確認はしていなかった覚えがする。今回のこの台詞で事を改めるのなら、正直に姉を殺そうと思います。そうすれば、彼らと同じ、殺された人間って事でまだ、神様は許して貰えるだろう。姉だけは…大丈夫、そうするように、三人分の苦痛を与えるだけですから、与えて与えまくるだけで、許されること何のだから…まだ、いいのでしょう。

「何か巻き込まれたの？…私が巻き込まれたって言うの？　　なら、それは勘違いね。コトシラ、私は初めから、巻き込まれたかったの。最初から」

と姉は言う。どうやら、ここで直ちに殺すことはなくなったみたい

だ。と言うよりは、殺す、前提でも、おれは姉を殺せなかったかもしれないな。

おれが殺されていたに違いないからだ。

「え、しゃあ、おれの企てを前々から知っていたとか？姉」

おれは、昨日のうちでパッと思いついたから、企てとはいわないのかもしれないが、カンの冴える姉のことだ…恐らく、おれがこの道を辿ることを知っていたのかもしれない。

ほとんど、予知能力と同じだな。

「あなたが弟を殺すんじゃないのかと、大昔から思っていたけど、…本当に殺すとは思ってはいなかったわ。って、事で企てていたことは知らない言うのが簡潔ね」

おれも口から出してみたかった単語なので、実際は、企てても目論みも立てていない。

ただ、そこにムカつく弟がいたから椅子でなぶっただけだ。親も同様。

「知らなかったで、いいんですね？」

「はい」

「一つ良いですか？」

話すこともないので、親を埋めるための穴を掘り進める。訊いておきながらですが、

ザャガリ
ザャガリ

「何かしら？コトシラ」

姉も手伝ってはいる。おれは鍬で荒削りしていて、姉はスコップで忠実に、墓穴を整えている…不器用な起用さが現れてるのか、正方形に形作られていく。
進行して、話を続ける。

「あの絵の具で本当に死ぬんですかね。人って…」

と、良い汗流しながら、単調に訊いてみた。黒色のパジャマはまだ着用中だ、この作業が終わり次第シャワーで汗を流すつもりです。

それと、朝からカラスがタカるので、生物はまだ、リビングです。

「？」

「何か言ってください。聞こえてます？」

スコップで二人分の墓穴を掘っているようだけれど、正方形じゃあ、足が飛び出してしまいそうな趣なのを彼女は知らなかった。
夢中で話を聞いていなかっのか、訊かないふりをしていたのかは置いといて、次の言葉をかけた。

「もう一度、言いますよ。姉が味噌汁に混入させたあの液体は、何です？」

分かり易いばず、これで分からなかったら、結婚しますよ。

「…絵の具と言いたいの？　　あの毒物を…」

「そうです。そうです。それそれそれ、…あの時言いそびれて、気がついたら親が死んでて、もう今更になるですけど、…あれは一体なんですか？　あの液体は…」

長々詫びるような、言い回しを投げつけるけど、いいよね。

「接着剤とか。その様なものです…簡単に手には入る、無味無臭の毒物と思っとけば、二重丸よ」

いや、華丸あげちゃっても良いかもね…などと、悲嘆にも見える、愛想笑いをする。

あ、悲嘆は錯覚でした。朝日が高くなってきていて、そろそろ、近所が活発になるから、その不安が姉の顔と合体したのでしょう。とんでも無い理由を付けて観るけど…

「そう…ですか。…ああ、しつこいようだけど、まだあった。」

話をせずに、黙々と穴を掘りたかったが思うように口が止まらない。一種の病気にも見える。

「もっと、しつこくして良いわよ。」

ありがとうですね。気遣いに…

「おれが作った、目玉焼き美味かったのかな～て…」

目玉焼きとは、姉と台所で並んで作ったあの料理です。

母は美味しいと言ってくれたけど、父は訝しげで険相な表情をはぐ

らかしていた。

「母の舌は、狂っているからね。父の表情の方が下手な評論家より適切よ。」

いいね。もっと聞いてみたい。

「例えば、…父に口が有ったらなんとおっしゃっていましたか？姉の感性で言ってみてよ」

おれは、姉の表現力の力を試す一言を言ってみた。

どうでも良いけど、姉の鼻辺りに土が付いてますよと、指で指した。

「『不味い物を食わすのではないと思われる、ま…息子の料理だから仕方ないか…』とか、言いそうじゃない？」

鼻をこすりながら、声も変えずに姉の地声で言う。

下手な上手さしている様でした。

「…そろそろ良いんじゃない？　コトシラ」

穴も大分掘れた所で、姉が言葉を発する。時間にして、数十分は無言で経過していた。

「ん…あ、んん、そうだね、掘りすぎたくらいだね。」

隣近所に見つかるのではないのかと、挙動不審していたさなかに、今の言葉は、驚くべき利発だった。

つまり、『驚かすのがうまいね。姉』を言いたかったのだ。

「綺麗に、正方形にしてるね。凄いのは姉の方だ。完璧すぎる姉は、あんまり好きじゃない…」

おれの口から思わぬ本音が流れ出たから、今度は自分に驚かされた。

「何を言っているの？　私は人よ。完璧な訳ないじゃない。…そのまま、神扱いまでしたら、許さないんだから…」

墓穴のそこから、そんな声が聞こえた。

いや、おれ自体聞いてなかった。自分の言った台詞に責任をもたずに、明後日の方向に、翻して深呼吸をしていた。

「この場合、怒ればいいの？」

姉は一人、孤独感にうなだれる。片手にスコップを持ちながら。

着々と準備を整えたコトシラと姉さんは、二人係で死体を袋でごまかし、両手を姉、両足をおれと、担当する箇所をわきまえて、順調に事を進める。

「バランス感覚おかしくて、可笑しいよ。姉」

おれは、先頭を歩いているのだが、どうも身長差でお母さんが滑り台を滑っている形に、…見える。空気滑り台とは、三人係でやっと完成するのだと、知らしめられるのも、また、滑稽劇場だ。

「あなた、毎朝、牛乳飲む習慣はどうしたの？」

「飲んでも、伸びません！」

別に、背外低い訳じゃないんだ。小学生の平均身長を知らない姉がわるいんだ。

「牛乳嫌いなの？　ダサいわね」

「牛乳の絵は描けるのに、牛乳飲めない人に言われたくありません！」

そう姉は、牛乳が嫌いだったのです。

「ミルクティーなら飲めるわよ。」

だ、そうです。

14

父を穴に備えて、埋める作業をしました。

母を先に埋めたのですが、母の体は意外にも、背が高く…なと言いますか、墓穴に留まることを知らないと言いますと言うか…半分に曲げて、収納したため、その隙間に、父をはめ込むのが困難だったと言いたいのです。

此処までの話、父はこの歳にして、体育座りを虐げられる結果になったともいえるのです。その体格に似合わない、体育座りはほぼ、笑いに近い埋葬になりました。

笑ってはいませんでしたが、姉は笑いを堪えるのが必死にも見えました。

俺から言える事は、姉は昔から父に虐められていた…と、仮定されるのです。おれはつい以前の記憶が飛んでいて、基本的な感覚や生活に困らない程度の行動力は覚えているのですが、…それなりの対応が出来て、家族もこの事情は分からないかもしれないが、…恐らくの昔から、父は姉を虐めていた。

数日間で家族関係の構図が理解できた。

毎朝、父は姉を起こしに来ることも…

なので、父の軽率な真向け面を拝んで笑い出したい筈だ。口元がぶるぶる震えている。

それに、父の扱いは酷いもので、母なら土に触れないように、浮かせて運んでいたが、父は手だけを二人で引っ立て、引きずるように、運んだのだったのだ。

可哀想なことに、靴を履いておらず、靴下だけが玄関のドアの下の狭い溝に、引っかかり、慣性の法則に従って脱げたのである。

素足のまま、雨で泥と化した土に、浸されながら泥が足に蔓延ったのだ。残念残念。体育座りも無念無想に映る。
死体は喋らないから、扱いが簡単で大喜びです。

「これでいいのよね？」

と、土をスコップでかぶせて、のちに、そう訪ねてくれたのは、姉の方だった。

天気は、昨日の夜と違い対象的な青だった。朝の風も髪の毛で感じるような透き通った青だった。

「これで良い…かな？　もしかすると、ゾンビ化して、また地上に姿を現すんじゃないか？　念のため、足の体重で土を固めた方がいいかもよ？」

提案は幼稚で、でも、ちょっとした遊びは大切だと思っての案だ。
案の定、もしゾンビに変わって、目の前に現れたとしても、鼻と口を姉の杓文字で叩き割るだけだから問題ないはず。
おれはそう思った。

「足の重力で固めるなんて、貧相で凡庸な考えね。遣るのなら、テープレコーダー５０００個分を段ボールに積めて、私たちの家の二

階から自由落下させた方がいいんじゃないの？　　…先に行わせて、冗談よ」

口を動かすのが得意になってきたのか、慣れてきたのか、今日は饒舌な姉だな。

昨日の夕食時の遣る気のなさはどこへ行ったのだろうか？
恐らく、天気で気分が変わったりするに違いないと、仮説を立ててみよう。…忘れないよう、心掛けたい。けど、忘れそう…

「姉の体重で、十分じゃないの？　　重たく無さそうだけど、人並みには、十分そう。」

前に、貧弱そうと評価した姉の体付き、でも、意外と底無しの体重してそうと改めて、仮定して表して観る。

暖かい温もりを感じるな～と思ったら、もう、大分早朝から遠ざかっているに見える時間帯だった。

正確な時間は分からないけど、８時くらいだろう。

「私の体重じゃあ、中にいる人が原型留めきれないじゃない。あなたがやりなさいよ。」

随分と歳の差が、さほど無いような会話を繰り広げる。どうしてだろう？

「つまり、『私は自分の体重を気にしています』を演出していると…ですね？　　太りたいのですか？」

「はい」

「…分かりました。では、二項目の話に従って、おれが土を挟んで、親を踏み潰します。」

丁寧な物言いで、おれは定位置につくことにした。定位置は、土の色が新しいかぶせたばかりの小山がある地表です。

おれの脳内では、姉は今の体型に満足して良ないのかと…認証を刻まれました。

確かに、引きこもりによくありがちな、欲求不満な体型をしている。いつも何食っているんだろう？

と、話は置いといて、おれは…

「かけ声は…スクリプイタクノライトネルサ！」

ドサッ

姉のいる目の前で、大変な乱舞狂乱語彙を吐き捨ててしまった。

ほとんど、直感の意味のない単語と言えよう。いや、新語か造語か、どっちかだ。

腰から若干盛り上がった小山に着地したため、パジャマは台無しに汚れてしまった。

洗濯機で洗えばいいのかもしれないが、おれは狩人の卵、そして、小学生五年生の生活力、言うなれば、洗濯物など、洗濯できないのだ。

あ、そうだね、姉に頼もう。

「汚れた。姉」

「…何かしら？コトシラ、まさか、今になって小学生気取りでいるつもりなのかしら…」

今始まった事です。只何となく、背中から飛び込みたい気分だったのです。おれは小学生です。認めますよ。一人前の狩人に離れないと認めます。

だから、今更甘えさせてください。

「…計算の慣れの果てです。すみません、計算していました。おれは、ずっと前から、姉の温もりがほしかったのです。すみません、弟を生け贄にしてすみません。」

口が勝手に、動いてしまった、突拍子を突く本心を言ってしまったかにも思える。

そんな事は考えまい。考えまいが、口からぽろりだ。やっぱり、カッコ良く生きられないのが現実なんだね。

「ここは、驚くべきなの？　　最初から分かっていましたといえばいい？」

「それは、俺にも分かりません。口が先走ったもので…」

おれは足を組んで、贅沢に手を頭部に回した、しかし、小山に沿うようにして仰け反っているため、ブーメランが地面に突き刺さったような不格好さに仕上がっている。

「あと…言っていいのかしら？コトシラくん」

くん？

「どうぞ、」

差し出すような、先方を譲るような言葉の使い方で、巧言をたしなめる。

「あなた知らないだろうけど、弟は生きています。」

贅沢三昧で、締めりっけの多い、それでいて、背中が地面の仄かな冷たさを維持しながら、まだまだ、暖かみのある抜かりのない身体に反復して、反射的に飛び跳ねた傍ら、正気に戻って、目を覚ました視線の先に彼女がいた。

おれは此処にいると…

おれはここで佇んでいると…

「え？　そんなの？」

クールビューティーな立ち振る舞いは、出来なくともおれは、立っていた、いつの間にか、その場に立っていたのだ。

背後には、父母の墓を感じて。

「そうみたいね。いやいや、そうですね。」

「言い方変えるな！可愛くない！」

そうか、まだ、生きていたのか、あの優等生は、殺したのにどうして死なないんだ？
難点があるのか、難点どころか、特異点か。いや、違う。神だ。
「弟を殺さないと行けないのかよ、また、…」
がっくりうなだれるフリをする。
「コトシラくんは、私の弟だけど、弟が二人以上いたら悲しむの？」
「悲しむじゃなくて、独り占めにしたいんです！おれは、」
その通り、本音は何時だってそうだったもしれません。記憶が失ったとかそんな回りくどい言い訳が正しかったのでは、なく。
純粋に、姉が…古見子さんが好きだからです！
決まっているじゃありませんか！
それ以外に、弟を殺す理由はありますか？
難儀な事したいですか？
したくないです！
愛に、絞められて殺されたいです！
「…問題ね。非常な問題。…私はあなたの愛には答えられないのが問題ね。だって姉だし♪」
姉姉姉！
永遠に、結ばれない。壁が…そこにはあるようです。
「そんなルール、誰が決めた！！！！！、よし分かった、みんな殺

して、誰も文句言わせないようにしてやるよ。」
もしくは、姉がおれを殺すかのどちらか…

「…頑張ってね」

15

あそこには、もういられないそんな気がした。

僕は、今から何をどうやって、生きていけばいいのでしょう？

僕は、他人に殺されるのなら、耐えることも出来た。けれど、家族である兄に殺されてしまったら、もうあの家には行けないのかもしれません。

姉までも、僕を殺す行為に賛同したし、親もすでに殺されていると思える。

生き詰まったあげく、僕を殺したのならわかりはする。

何か原因で、殺すのなら頷けるて、潔く僕は一人何処か知らない場所にで行ける。

し、行ってしまえる。

施された、裏切りとは言えた物だな、血縁から裏切られるとか、必要とされなくなるとかは、はっきり言って精神的に参ってしまう。

歩く道筋も見あたらない。

今の僕は、袋から出て、外の空気を吸っている状況なのだけれども。

行く宛がなくただ、ぼーと黙りしているだけだの木偶の坊だ。

人としての一時でもない。木偶の坊の休日だ。あえて言うのなら、何も考えない方が楽。

けどけど、何もしないとはよくないと思う。ここまで遣ってきた経験を殺すのは、僕にプライドを預けた人に失礼になるからだ。

誰かが言っていました『無意味でも良い、取り敢えず、動け…続けろ』と…

僕が僕でいられるのは、そのオヤジの言葉が原因とも言えた。
無気力な僕を変えてくれた人だ。僕はその変えてくれた人に何一つとして、お礼を出来なかったけれど、…お礼が出来なかった分、成し遂げなければならいとも思った。

僕が寿命で死ぬまでは、死んだようには生きるなと…

それだけ、の動機で動いていると言っても過言の沙汰ではないな。
何度も死んでいる奴が何を言っているのだろうか…

と…

さて、ここで心の整理が出来たところで、動きだそうと思おうじゃないか。これから始まる第１５回目の人生。

いや、６０５回だったか？
うん、そうだった。

初めて死んだのは、オヤジに頭を潰されたときでした。よく覚えていませんが、はっきりとオヤジは言ってくらましたしね。父親。

ザサ…

立ち上がり気味に、一つ膝を突いて、勢いに任せて、立ち上がった。
空気と同調して、息を吐いた。
何も感触のない。気温と。

朝一に、毎度見かけるデータ資料配達のお兄さんと、突き抜けるような怪獣の鳴き声とを目や耳に焼き付けて、立ちあがる。

「どこに行こう…」

呟いては、もうほとんど決まっていたので、それは意味がないと言うことになる。

行く場所、辿り思いついた目的地は、部室。

家に帰ったとしても、また殺されて、同じ事の繰り返しが、何度も起きそうだから、僕はもう家には戻らないことにした。

これで良いのだ。

兄や姉の事なんて忘れよう。僕は僕なりに、新しい人生を作り上げるだけなのだから、…それで良いはずだ。

歩き出す。

服はボロボロ、血は着いていない、服自体は綺麗なのだけれど、服が荒んでいる。

あちらこちら、穴が転々と在ったり、思いっきり破けているのも見て取れる。

腹部は、お腹を隠しきれないくらい、ざっぱりと寸断されていた。

ああ、これどうしよう？

最近のクリーニング店は、ここまで修復不可能な服でさえ、綺麗に治してくれるから驚く。

お父さんが前、交通事故にあったとき、服が観るも無惨な有様へと、損害していたのだが、入院していて、なかなか完治しないお父さんに比べ、目にも驚く速さでクリーニングが終わっていたことが昔在った気がする。

要するに、クリーニング店は服の修復までしてくれるのだ。

便利な世の中にさせられたと言うより、そうなったのだ。無駄な所に気配りすると評価します。

「お腹が空きました。」

死なないを前提すれば、断然餓死で死なないはのなのですが、人らしく生きるには、食べ物を食べなくては行けません。

「めんどうくさい…」

腹が減っても死なないけど、腹が減ると、この体…動かなくなるのですよね。

面倒が異臭で、僕の善たる心も腐ってきます。

時々、なぜこの体よく動いてくれない！

不公平だ。とか、情緒不安定な時期も有りました。

懐かしく思えるのも、脳みそが気丈に機能していて、思い出したからだと思います。

思い出も過去の物で、兄も姉も記憶の一部になってしまった。

悲しくなんか在りません。それでも、悲しいと思わないと、人間じゃないのですので。哀しんでみます。

「腹も減って、家族も居なくなった…どうすることも出来ない…」
完全に独り言で、周りに人がいれば、確かに凍てついた視線を送ること間違い無しの思し召しだった。
今まで、言うのは止めよう。思うのはやめようとか、ずっと、ずっと、ずっと、頭で思っていたけど、人って。
生きるのが難しいです。
簡単に、死んでも、生き返ると、また死ぬ。
いずれ、死ぬときが来ても気づかず死んでしまいそいだ。
なので、自分の生きた証を残すと、今決めました。
「そうです。店を物を盗みましょう。」
僕は後には引けない。帰る場所がないからだ。そして、お父さんの言葉も守る。人らしく、死んでしまいそうな局面に出くわしたのなら、『取り敢えず、足掻け』と…
あがいて、物を盗みます。人は殺しません。人として、人だけは殺しません。
コトヤは、決めてしまった事に重大さに気づくことも知らず、ひたすら、頼りない足取りでスーパーマーケットか、コンビニを探す。
土地柄の所為で、小売り販売的に、小さな店舗が幾つがありますが、一番客足が少なく、それでいて尚、服装に偏見と差別をしない店を探し出すのは、困難気味でした。
それでも、その難条件を克服して、近くのスーパーマーケットに立ち寄ることが出来たコトヤは、

「スーパーマーケットが僕の見方だったか…頼りない…でも、仕方ない」

などと、贅沢な言葉を吐き捨てました。

それでも、在った事を喜ぶべきか…敗れて朽ち果てたTシャツをなびかせ、感謝の心で店舗へと、足を踏み入れたのである。

人通りの少なくより安全の道のりを渡ることで、時間がすっごい疲労ったことは確かである。

「死なないでおくれよ…僕の体」

栄養が行き渡らない体は、覚束なく、思考回路も少しずつですが、おかしくなっていました。

「弁当箱ばかりだ。弁当にしようか、麺類にしようか迷う。二沢だ。」

弁当が列座している棚に、手を置いてみたら手がヒンヤリしていたことだけは、微かながら覚えている。

視界も曖昧で、目が霞む。

お金がないから、盗んで食べると言うのだが、コトヤは、その体力も残ってないようにも見える。

このままでは、コトヤはその手に持った二つの弁当を屈んで食べてしまうのかと思うほどに、疲労疲労で、フラフラだ。

「駄目か、コンビニならともかく、スーパーマーケットには、フライパンとか、ヤカンしか売ってなくて、肝心のお湯が売ってなかった…ラーメンは食べれない。」

口では残念そうだが、弁当を携えている両手は喜んでいた。

それに、気のせいなのか、辺りは人の気配もまるでしない。

自分の心臓の音が聞こえそうなほど、静かだ。

貸し切りか？
貸し切りなのか？
贅沢しちゃえ、

奇妙に、人も定員もいないスーパーマーケットのトイレに駆け込んで、弁当の蓋を開けたのは、言うまでもなかったであろう。
そう、贅沢とは、お茶の入ったペットボトルを、三本取ったことを示していた。
そして、
今のコトヤは、洋式トイレの便座でペットボトルと並んで、弁当を食べて始めたのだ。

「美味しい。」

本当は、コトヤは心の底から寂しかった。

16

コトヤの経緯は、近くのスーパーマーケットを大回るするような形で、遠回りしていたのだ。

人が居ない事に驚くよりも、誰も居なかったこの状況に感謝する方が一番だった。

それでだ、その感謝を込めて、弁当を食べ始めたのだった。

「美味しい」

『頂ます』を差し置いて、美味しいが口から垂れ流れたのも、人らしい振る舞いの一つだと、心にくぐる。

人の本心とも言えよう。本当に死ぬほど、腹が減っているときは人って、言葉よりもまず、行動が先にでる。を僕は弁えて、居た気配なので、僕自身、この様に表現して見せたのだ。

瞬く隙を見せない速さで、弁当箱の中の隅々の食物を胃袋に流し込んだ。喉に物が詰まりそうな雰囲気を飲み込んで、ウーロン茶を一気に、頬張る。

此処まで、この時まで、生きてて良かった…と、思わせぶるぐらい食べるのに熱心に、成ってた。

トイレの中での食事は、どの食べ物でも絶品と知ることもできた。

特に、トイレのドアを見つめながら、付属のひじきを食べるのも素敵なものどたとも、悟った。

明日から、トイレで弁当を食うことに決めた。勿論、衛生管理も怠ってはいけないから、女性の方の憚り所で、食すことに徹する様に決めた。

さて、…

コトヤは、迅速力で弁当を完食したため、次の行動を考えていなかった…考えきれなかった。

との事で、考える思考回路が回らなかっと、ほざこう。考える余裕すらも在るのに、思考は完全に停止していた。
人とは何か？　人とは、二足で大地を踏みしめる動物…
アキラは特別に死なないから、非自然の二足で大地を踏みしめる動物と成るのだ。

生き物で、形が尽きない。砕けない。
食べ物がおいしい。生まれたわけを気づかされる。

コトヤは、一人、トイレに引きこもった。

数十分でしたか…洋式便座の貯水箱のの角に頭を乗せて、トイレの上の表面を眺めていた頃に事が起きた。

コンコン…

外からノックが聞こえた。正確には無理やりにも、ノックの音を聞かされたになる。その応答に答えるため、口を動かした。
深呼吸して…

「中に、はってます。」

これで通じるだろう。通じなかったら、僕は日本語を喋っていないことになる。それは大変だ。

「あら～入ってるの。残念ね」

若い女性の声が聞き取れた…年齢的に二十歳に三年足したくらいの年齢だ。

僕は思わず。

「定員さんですか？…すみません。僕、お腹空いてて、つい、カッとなって、商品のサイカスカ弁当を二つもなすんですいません。」

この場に、一般客が来るはずがないし、女性客が増して、来るはずもない。それに、人が居なかった理由なら…回転準備中立ったとかで、何かの間違いが起きたと思える。

結果、女性店員が僕みたいな小学校低学年の姿をした僕をたまたま観て、此処に来たと推理する方が的確だろう。

だと思われたが、

「二回謝りましたね。ふふふ、この私に二回謝ったてことは、…覚悟なさい」

ん？、日本語の様に聞こえなかったあげく、何を覚悟して良いのか、まったく、理解できない始末だった。

不思議な定員さんだ。

「ちょっと待ってください。…今、出ますから…」

ガチャリ、

丁寧に、ペットボトルのラベルを弁当箱に詰めて、割った割り箸を折って、ペットボトルの中に収めた。

弁当箱を弁当箱で閉じ、その上に、キップを取って踏み潰したペットボトル三つを重ねて、それを落とさないように、両手で掴んで、トイレの扉をを前髪で押した。

ギギ…

目を向ける。

「はっ」

定員さんでした。結構、若い。声の方が加齢していたと、言うか、老けていた。

「可愛い子。」

定員さんは、僕を見下ろして、口を割った。

「僕、不思議な子だから死なない。よ」

不思議な事を言えば、きっと、この弁当箱の盗み食いも許してくれるはず…

「ふーん、だったら試すね。死ね」

グチャリ、
瞬殺です。片手に持っていた掃除用具で殺されるなんて初めてでした。杓文字の姉を思い出す。
僕の上半身は、バケツに吸い込まれるようにして、ハマった。
数分後。
僕は目覚めた。冷たいタイルの温もりに包まれながら…
「え、弁当箱をゴミ箱に捨てることが出来なくて、…未練です。」
場所確認する前の段階の言葉、状況が異なる世界に移動したら、さっきの出来事は、単なる無駄なことに変換されるのです。
目が霞んで、視界がぼやけていた。
そこに数秒かけて、僕は現場を確認し始める。
「コンビニ？　　あ、違うな。」
さっきまで元居た、スーパーマーケットとと気づく。
「そうだ、あの定員さんは…」
「よう、坊主！　　本当に死なないみたいなんだな。驚かされるよ」
と、部活の副部長によく似た定員が現れた。
「…何方ですか？」

素直に、きく。上半身が筋肉痛していて、体を起こすのがやっとだったが、ためらい無く。言葉を紡ぐ。

「おれだよ。おれ。副部長だ。」

どうやら、また、平行世界を乗り換えてしまったらしい。時間のズレた世界で副部長と会うなんて…。

「僕の事、知っているんですか？　では何故、始めに、坊主と乗り気で赤の他人を装う事などしたのですか？」

すかさず、単刀直入に質問。

「馬鹿、今、思い出したからに決まっているだろ？　思い出したのを気づかれないようにするのが、オレ流なのさ。」

乗り気な番長で口調を和らげてる。

「僕は理解できない。不釣り合いな世界を行き来していましたけど、時間軸がズレているなんて、現象は初めてです。何かあったんですか？」

僕が死なないことは、部活道の人で副部長しかいないから、この言葉も副部長有線。

「…一言、」

黙りこくり、険しい表情を一瞬だけ見せたが、すぐさま、和やかな表情に戻す。

「一言、言うとだな。コトヤ」

何でしょう？
僕は、冷たいタイルに足を延ばして座っていり状態で、彼を見上げた。背後には、ピーマンが鎮座している。

「この世界は、終焉を迎えている…は、恥ずかしいから、訂正…賞味期限が切れてしまったらしい－すべてな。」

世界が終わった？
何の話をしているんだ？
今日は嘘をついて良い日でしたか？
カレンダー、日めくりカレンダーは何処にあります？
携帯電話が無いと何時もこうだから困る。お父さんなんで、僕に携帯電話を買ってくれないのでしょうね。
家族全員、携帯電話無所持ですよ。困ります。

「いつから、その…世界は、」

「…何時からだったか…よく覚えていないな。記憶力の腐った人で有名だったじゃん。おれ」

顎に、両手の人差し指を使って固定して、考える素振りをする。宇宙人を観ているようで、ファンタジーだった。

「何故、此処があるんですか？　　最後の砦ですか？」

問題はそこじゃなかった。何時、何処で起きたことなのか、よりも、どうして今があるのかに疑問を抱くべきだ。現在、抱いた。

「彼女おかげと言うべきか…お前みたいな、異能の力というか…俺がただの脇役だというのか…そう、素直に言って、お前を殺した、彼女がこの今の状況を作り上げたと言おう」

彼女とは、もしかすると、あの言葉通りにしてやってくれた、あの定員さんでしょうか？

あの人も、選ばれた、僕と似た人とか言いたいのかな？
なら、信じられませんね。状況維持をこなす人物なんて観たことないです。しかも、その力は、今でも反映中。

「すごい人ですね。あの頭の悪そうな人がこんな事しているなんて、…今の言わないでくださいね。本人には…」

「い、言う訳ねぇ～だろ。俺まで殺されてしまうじゃないか、おれはあくまで一般客なんだぞ！　立場考えろよ！　化け物に囲まれてビクビクしているおれの生き様を！」

化け物に囲まれて？
と言うことは、本当に副部長はただの人間だったらしいのか…
なんだか、寂しいです。

「他には？　部活のメンバーは、みんな大丈夫ですか？」

僕は奇跡を信じてみたかった、現実がどのくらい理に反するのかを…

「あ、それな、……みんな死んだ。あはは」

やっぱ、そうか。

17

「お。この建物の外に出るなよ。蒸発するか、粉になるか、はたまた、弾け飛ぶかのどちらかに、体が死ぬから…」

教えてくれた人は、副部長さんでそれ以外の何者でもない唯一無二の副部長だった。

「…え～と、その言葉はとても有り難うなのですが、副部長さん。でも、明らかにそれ以上に、厄介な人が居ますよね？　あの方をどうにかする必要があるのじゃないですか？」

改めて、人類最期の境地を副部長さんと共に巡る。境地巡ると、名をふろう。

このスーパーマーケットは、ジャスコと等しく、大型チェーン店のあれで系列で、一通り本格と毅然しているらしい。

最初にこの店に入った時、誰も居なかったのは、恐らくその瞬間に次元と時間の均衡が崩れて、大きく未来に飛ばされたとか、根拠のない言い分で副部長は坦々と推理した僕に語る。語っていた。

人物紹介もすでに終了して、もう、この空間の人物の顔と名前は、しっかり頭に刻まれている。

自己紹介しようと、姉のより少し殺人癖の在る女性店員に、またしても、トイレ掃除の邪魔だとかで、左右対称の僕の体をモップで両断する羽目にも合わされた。副部長さんの所為です。

それに、まだ他にも、店員が居て、だけども、人間に恐怖したとかで、永遠に、冷蔵倉庫から出てこない人も気になる事ですよ。本当に…

「あいつは、病気みたいなものだからな、仕方ないだろ？　…何だか、昔、恋人をこの手で殺して、それが楽しくなって、目覚めたとか、ミルクティー作ってあげた時に語っていたぞ。」

今の言葉で決まりですね。姉の平行世界住人です。別に、姉はミルクティーが好きだとは言っていなかったが、妙にかみ合うところがまさしくそうだ。

「僕は、一緒、あの人の様なキャラとは接しきれないようですね…」

何かが確信に変わった音がする。

「何だ…お前？　がっくりうなだれて、気持ち悪いぞ」

だってですよ。考えると、毎回決まって、凶器とは思えない多彩な物物で殺されたよ？
笑っちゃいたくてうなだれまるよもう…
この６００回くらいの死に様で、一つも凶器でいたぶられ、ぶちのめされているんですよ？
驚喜もこみ上げてきますよ、全く…

「それは、お前の運命とか、定めなんだろうよ？　恥…」

この人、格好いいと言うと、顔を隠したがる人なんですね。昔は狩りでメチャクチャ、耳を塞いだりするくらいの大層な物言いをポロッとこぼしていたのに…

社会人って、辛いですね。

「運命とか、僕には関係在りませんが？　元々、人として、生きているだけです。運命運命は人らしいではありませんか…なので、保留します。」

運イコール人らしい確率的な選べないレール。僕は、人らしい様生きるため、その話は論外だ。

「何言ってんだ。お前？」

理解されてなかった。と言うか、元々興味なかったみたいだ。

コトヤ一行は、一階しかないこの建物をひたすら徘徊していた。あまり広いとも言えない。これなら、上手なコンビニの方が奥行きが在りそうな気もする。なんだか、品揃えがイマイチでほとんど野菜や日用品ばっかりだ。僕がこの店の店長に抜擢されたその瞬間に、品物の位置を移動したり、看取りをもっと気配りを配慮する。

寂しい空間です。素朴、とは、表現違いと思いますが、そのような感じです。

思った。何時までも此処に、居座り続けるのも、寿命がある。確信できる。

「副部長さんは、…その体内時計でどのくらいの間、ここの敷地に居座っているのですか？」

とやかく、聞いてみる。何もしなかったら自分を失いそうな…奇妙

な世界だから…

「お前は、おれの体内時計を正しい時間の基準にしたいのか？勘違いするなよ。俺は時計じゃない」

人、いつまで、箱の中にいつまで留まって。いつまで精神を保つことが出来るのか、彼が証明してくれそうです。

「いやいや、違いますよ。副部長さん、ここで何年過ごしたか、どのくらい、こんな場所に留まり続けたのか…知りたくて」

大まかで良い正確な時間は求めていない。

「十年くらい？　じゃあ、ないか？」

十年、広大な年月だ。僕一人だけなら確実に自殺している。死なないけど。

つまり、凡人がこの場所に十年間、なんの狂いもせずに、この状況を維持し続けることが出来たのか…

そして、僕が新たな新メンバー。

「年をとったりするんですか？」

「とる奴もいる。とらない奴も居た。とらない奴はほとんど自殺した」

憫然な事だ。

変わらないと、心も変わらない。そして、マンネリして死ぬ。無理して生きる人。無理せず死ぬ人。

やばいやばい。なんだか、思考力がおかしくなってきた。僕も壊れ

るのが早い人かもしれないな。

「あ、お前、豆腐の角をひたすら見つめる事を出来るか？　　あと、天井を一日中眺めることだって出来るか？」

何を言い出すのでしょう？　　もしかすると、これで狂い出す人の狂い出すまでの健康寿命を量ろうとしているのでしょうか？

なら、僕はアウトですね。

待てよ、

「自分からは、無理です。他人がやれと言うのなら、出来ると思います」

「…」

なにそれ？！

僕はアウトですか！？

「ん、ごめん。思考停止してた。この数年で本当に色々観てきたから…」

微妙は所で、思考停止しないでください。怖いです。ただでさえシュールなこの状況下で、それは違反ですよ一場面上。

「お前、一人っ子だろ？」

いきなり突然唐突に、尋ねる。

大量のパプリカの箱を見透かしながら…

「僕は、兄が居ます。姉も居ます」

僕もオーストラリア産の挽き肉を横目に、言の葉を反作用させる。

「ち、」

「…」

静寂が包まれ、列をなす洋菓子コーナー。

「お前、メロンケーキ好きか？　俺がおごってやるよ」

「いいです、いいえ、入りません」

違和感なさ過ぎて気づかなかったけど、あたり一面のこの食品やあの商品は誰がどう製造して居るのだろう…

「その前に、全部無料じゃないのですか？　どのせ、買う人なんていないのですし」

「…」

怖い怖い怖い。
ホラー放ってる。何時からこうなちゃったんだろう？
ヤバいとかじゃなくて、うもろぼしい。

あ、うもろぼしいは造語ね。いかにもそんな感じが漂うから使用してます。

必殺技を考える要領です。

「一言言うぜ。そんな事して、この摂理が保たれると思うか？」

思し召し…

僕は人らしく、生きるを選んで盗み食いを働かした。それは、自分の意志で決めたこと、どんな時だって、自分が一番大切、それが重視して、人が決めたルールに背くという行為だった。

その時の悪事は、一時なもので…

頭が混乱した。

「つまり、何のこっちゃ？」

「要するに、ここでのルールだけはも待っておきたい。商品は必ずお金で買う、…わかれ？」

それ以外なら、人を殺したり、仕事をしても良いてことか…

「重要性を重視して、生きているのですね」

皮肉ですよ。それは誰が決めて定めるルールですか？

彼が勝手に決めて、俺様気取りしているだけでは？

殺してしまおうか？

なんてコトできませんね。

「ずっと、そうしてやって退けた。これからも長いぞ。オレは、誰かに殺されるのはごめんだからな。年を重ねて、死ぬのは恐ろしいことに諭されたんだ。」

「臆病者でいいんですか？　副部長さんそれじゃ、あの人に早めにやられますよ？」

現に、僕は二発やられました。

「俺も、何度かやられそうになってな。ほら観て観ろ。この方から反対側の腰辺りまで連なっている傷跡を…」

ざさ…

うわ…酷い。なまで観ると、その痛々しさが分かる。僕は、これよりも悲惨な感じ八つ裂きに切り裂かれていたんだろうけど、時間が経てば、完全回復だ。問題ないですよね。

「開いて良いですか？　爪で…」

「お前、キャラが腹黒くなってるぞ！　戻れ」

戻りません。

18

「私のどこが、好きなの？」

「体です」

コトシラは、ありきたりな事を言って、姉をほんの少し弄んだ。正直には…そう、言ってないけど、何処かでは正直なんでしょうね。

「面白くない冗談はやめてくれる？」

「冗談なら、冗談で良いです。おれは本気だったんですけど、姉には、子供の戯言としかとらえきれないようですからね」

「なら、それで良いじゃない？」

姉は、分かっていないのか。遊びで会話を楽しんでいるのか、ちっとも分かりはしない。言葉が無感情過ぎて、心が読めない。

「言っときますけど、はっきり言って、私に性欲を求めても無駄よ？　だって私は男だから…」

「うそを言うな！」

おれ達は、いま、何もしていない。

片づける物は、家族でしたから、もう何かを起こすなんて言葉しない。

退屈なんかない訳がないけど、取りあえず、だべってる。

場所は、勿論、姉の部屋だ。
「嘘をついて何が悪いの？」
「嘘は、…嘘だから、駄目だ。と言いたい」
「なら、弟が不死身なのは、信じてくれるたのは何故かしら？」
「あの弟を葬った日、袋が忽然と消えたから、…死体が動いたのかと…それでだ」
死体はまず、動かないのが本来の自然的ルールだ。死体に口などない。と言うくらいにな。そこから、考えると…ファンタジーなこの世界の特異特典が追加されているのだとするのなら、死体も動いたり、絵からエネルギーが発生したりするのかもしれないとの案が、一理としてあげられるのです。
彼女は、こう…なんて言うか、微妙なセンスがあるから、情報もマニアックな所から上げるとの案もあって、信憑性に欠けていたとしても、嘘は言っていないことだけは、感じられるのだ。男とか言ったのは…まず、物理的に嘘だと分かる。理由なら…姉を起こすとき、わき腹を握った際に、感じた感覚だけで十分証明出来る、あれは女性の感触だ♪
「私が運んだのよ」
「嘘は休み休みに言わないと、効力を働かせませんよ？　姉」
昨日の話になるのだが、か細いくか弱い姉がテクニックだけで、弟をあのゴミ収容所まで送り届けることは出来るはずがない。探偵もびっくりする推論すると、外を出て突き当たりを右に曲がれば、ゴミ収容所がある位置関係なのだから、極めて、入り組んでいない道筋になることは確かだ。

位置関係を点と点で結んで、距離を測ったとしても、道のりとそう体して変わらない距離になる。そこから、姉は、家を飛んだり道裏を利用したり、人の家のヘイをかいくぐったり、下々には到底不可能な能力を使えないのだ。
これは一種のハンディでそれをハラんでしまえば、姉は超高速でゴミを捨てることが出来ないのだよ。逆に、遠心力を利用した運搬法も不可能で、決定づけて姉は、一人でゴミも捨てきらないのだ！

「姉姉！　ベタ惚れです」
「い…意味が分からないわ…由緒正しい会話を成り立たせてくれる…かしら？」

正しい会話は成り立っていなかったのか、頭が働きすぎたとかか…

「えっと…おれは、姉がずっと料理をしていた事をわかります。風呂場からまな板を包丁で叩く音が聞こえていた、それが証拠です」

すみませんが、これは虚言でいて誠の発言ではないです。駄言です。駄目な言葉略して、駄言。

「当てずっぽう、言っているのなら、惜しいと頃ね…私は、鉄板料理に使われるアレを使用してたの…」

アレを包丁代わりに！？
い…いや、姉なら杓文字でまな板を叩いて欲しかった。ちょっぴり、残念な気持ちに誘われますけど、実用性で考えれば、アレの方が全然有能に使えるし、そもそも杓文字はご飯を切る道具だから…使えませんね。
納得するコトシラは、姉が杓文字を使って弟のとどめを刺したことを忘れているようだった。

「ホォークでだろう?。正解は…」
「私を試しているの? アレがなんというのか知らないとでも思ってるのかしら…起し金よ…ね?」
てことも言うのか?
「面白味のない冗談を言ったわけだが、ホォークのあの串刺す針の数は何本でしょう?」
おれは、困惑させるのが大好きなので、こうのように、問題を出すために、計算していたのでした。
「一本以上ね」
「正解」
「箸もそれに属されるやん!…と言ってほしかったわ」
「おれにそんな発想力はない」
つまり、こんな感じの会話がしたかった。
「嗚呼、話が変わっていたな。姉は、ゴミを運んだか、運んでいなかったかの話だったけど、姉が運ぶ為の動機はないのでこの話は、プラマイゼロで…姉が運んだのでも、死体が歩いた事で無く。姉は反抗体質の素直じゃない人で決まり、それでいいだろ?」
強引に可決した。
今、姉の部屋にいて、姉は座る椅子もなく、仕方なく、一階に在る使われなくなった真空管テレビを椅子代わりに使っている。俺はいとえば、仕方なく、壊してしまった椅子を修理し出いる感じの状況だ。

何もしていない～は嘘に成るな。

「駄目」

「何が言いたいんだよ。姉」

暇なのか、否定しまくる、姉。呆れて物を言えない。

ちなみに、姉の為に、椅子を修理しているわけではなく、武器として、椅子を使いやすく折りたたみ式に改造と強化を加えている。近くのホームセンターで、ボルトと鉄刀木を購入し、より高みの殺人兵器を作りべく姉に素材を買わせた。

親のクレジットカードを使うなんて外道過ぎるけど、本人じゃなくてもクレジットカードを使える世界にしたこの世界が悪いのです。

購入後の姉の話は、すごく重かった、特に鉄刀木が…などと他愛のない独り言を無愛想に語ってた。

「私も落ちぶれたものね…」

「寂しさですか？」

昔なら、絵を描くくらいで、その他もろもろは必要ないと、存在感が感じられてたが、人間、中身を割ってみると意外と大したこと無かったり、依存したりしますからね。ま、どちらともにしても時間が経つと飽きてしまうものですからね。

押したり引いたりが、肝心、平常が良いと思う。

「人らしい所があっていいんじゃないか？　　別に醜く見えるわけでもないし、」

「普通は、私にとっては敵だったんだけどね」

発現。

おれの言葉を被せるように、言葉が遮るように、声の音量を三くら

い上げた声帯で言った。

「痛いこと言わないで、くれ。ま、姉は変わってると言うより、優れている」

「あなたは、良くできているわ、しね」

姉は、絵の具の調合で無味無臭の毒物を作ってしまい人で、大概のことはあらまし、こなせる。弟は努力家で、姉は才能派。くそ羨ましいじゃないか！

おれは、人並みに人を殺めて、少し有頂天になってたというのに、姉弟はその何千倍も人とは違う所まで来ているじゃないか！

悟ってはいけない事を悟ってしまった。

「でも、姉は何でも出来て、僕は人並みというか、平均的な人間でくそ理不尽さ気づいてしまった！。姉！　おれを殺して！」

おれは、人類を滅ぼすための計画を立てていたが人間機能が人過ぎるため、死ぬことを選んだ。

「駄目」

「うおあああああああああ」

「落ちて聞いて、コトシラ」

コトシラは、泣き出しそうな声で、一生懸命使っていた椅子を握りしめまた。

こんなのオモチャだ！

おれはこんな物でお巡りさんが居る交番に殴り込もうとしたんだぞ！

弟もまだ生きていると言ってたし、うおあああああああああああ。

「あなたは、何も出来ないけど、あなたはすべてを動かす何か思っ

ているの…神話的存在能力を持っているコトシラなの、あなたは、
原点で滅点で、生きているだけでも、すべてが…太陽…そう太陽よ。
太陽みたいな感じの」

わかりました。

「おれ…世界を滅ぼしますね」

コトシラと姉は、世界を終焉へと導いた。元凶でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9554z/

コトシラ姉。

2012年1月14日13時54分発行